

柏原市遺跡群発掘調査概報 Ⅱ

—太平寺遺跡・安堂遺跡—

1986年度

1988年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

本書で報告する調査は、いずれも生駒山地西麓におけるマンション建設に伴う緊急発掘調査です。近年の地価高騰と住宅不足は市域の山麓部にまでマンション建設という形での開発をもたらしました。東高野街道（旧国道170号線）に沿ったこの地域は、7世紀代に次々と創建され、8世紀には聖武天皇、孝謙天皇らも行幸された河内六寺の堂塔が美しい甍を並べていた地域です。今回報告する調査でも知識寺に関連する可能性もある遺構が検出されています。

そこに今、マンションが建ち並ぼうとしています。このようにして失われてゆく遺跡を、可能な限りの調査によって未来に生かせるように努力することが、現在を生きる私たちの最低限の責務ではないでしょうか。1件ごとの調査面積が狭いため、過去のこの地域の姿の全貌を一挙に明らかにすることはできませんが、今後とも、少しづつの成果をこつこつと積み重ねて、地域の歴史を解き明かしてゆきたいと考えます。

末筆ではありますが、「今回の調査にあたり御理解、御協力をたまわった、発掘届出者をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

1988年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は柏原市教育委員会が昭和61年度に原因者負担事業として実施した太平寺遺跡86-2次調査、同87-1次調査、安堂遺跡87-1次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 竹下賢、森島康雄、石田成年が担当した。
3. 整理、本書の執筆は森島、石田が担当し、第1章I-4については近藤康司の助力を得た。
4. 調査に要した諸費用は、それぞれの依頼者の負担による。
5. 調査の実施にあたり、次記の諸氏の参加、協力があった。(順不同・敬称略)
石田 博 北野 重 安村俊史 桑野一幸 寺川 欽 谷口京子
藪中優香 松下 修 秋田大介 稲岡利彦 近藤康司 竹下彰子
出口美佐子 飯村邦子 乃一敏恵 村口ゆき子 横関勢津子 吉居豊子
6. 本書に使用した標高はT.P.、方位は注記のないかぎり磁北である。

目　　次

はしがき

例　　言

目　　次

第1章 太平寺遺跡.....	1
I 86-2次調査.....	2
II 87-1次調査.....	9
第2章 安堂遺跡.....	20

図　　版

第1章 太平寺遺跡

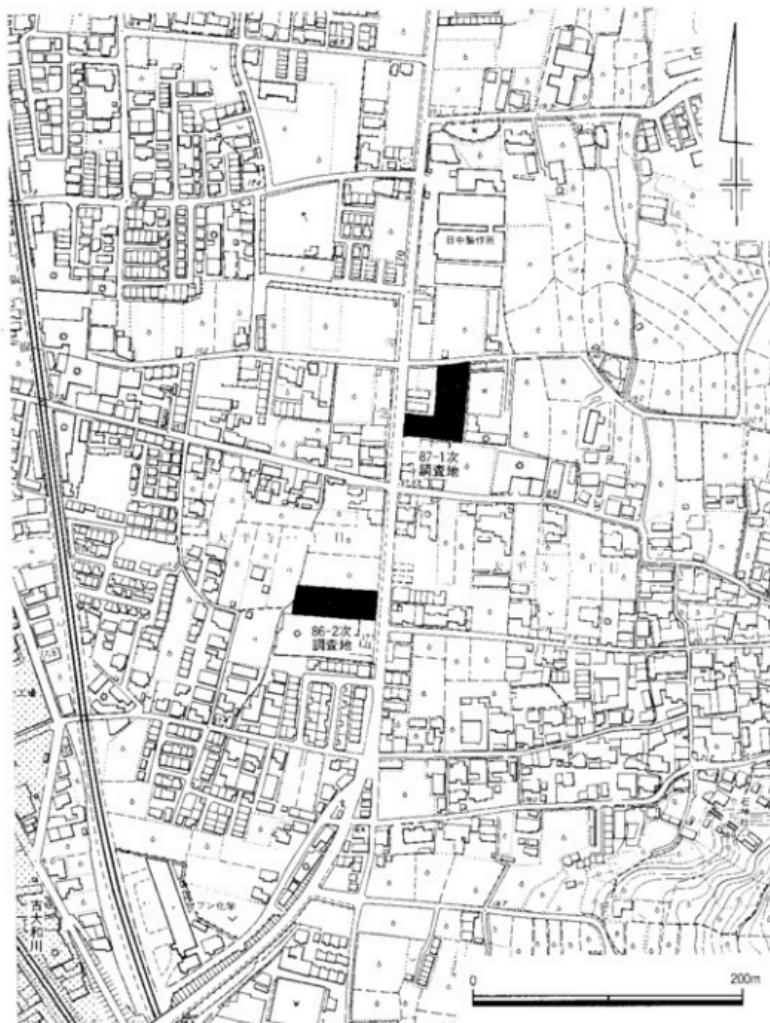


図-1 調査位置図（方位は真北）

1 86-2次調査

- ・調査地所在地 柏原市太平寺2丁目15-28
- ・調査期間 1986年12月8日～12月18日
- ・調査面積 180 m²／1250m²
- ・調査担当者 石田成年

1. 調査に至る経過

柏原市太平寺2丁目において共同住宅建築の計画があり、当教育委員会が調査依頼を受け、まず1986年5月中旬に試掘調査を実施した。その結果、奈良時代を中心とする遺物の出土があった。教育委員会では調査の必要を認め、数度の協議を経た後、1986年12月8日～18日まで調査を実施した。調査は対象地の東に東西20m、南北9mの調査区を設定し、橙灰色砂土（第7層）までを重機で、以下を緑褐色砂礫土（地山）まで人力により掘削した。なお、調査に要した諸費用は依頼者である山本光勇氏の負担による。

2. 位置と環境

当該地は大和川と石川との合流点から北へ約800m、吉大和川の右岸氾濫原に位置する。標高は約18mで、現在の大和川水面よりも低い位置にあたる。生駒山地南端西麓には旧石器時代から歴史時代にいたるまでの遺跡が数多く存在する。特に東高野街道沿いに建ち並ぶ「河内六寺」については、聖武・孝謙天皇の行幸や参拝がおこなわれたことが『続日本紀』により知られ、平城京と諸国を結ぶ交通の要衝であった柏原の地でも中心的存在であった。「河内六寺」の一つ、東大寺大仏造頭の契機となった盧舎那仏が安置されていた知識寺は、当該地の東約200mに位置し、現在その東塔心礎が石神社に移されている。

3. 遺構

調査は前述のように対象地の東に20m×9mの調査区を設定し、第7層までを重機、以下を人力により掘削、精査した。基本層序は上から、盛土、旧表土、茶灰白色細砂土、灰色砂土、橙灰色砂土、青黒色砂質粘土、青緑黑色粘土、黒灰色砂質土、緑褐色砂礫土（地山）の順である。第5層、第6層、第7層については古大和川の氾濫により瞬時に堆積した砂層とみられる。確認した遺構面については2面あり、江戸時代の畝を第9層上面で、奈良時代の溝を地山面で検出した。氾濫原という遺跡の立地上、湧水が著しく多く、調査に際して難渋した。

江戸時代の畝として、東西方向の畝を5条検出した。1条の幅は115cm～140cm、高さは15cm～35cmでその断面は蒲鉾状を呈する。隣接する畝との間に幅15cm前後の溝がある。最も北の畝の西端で、銅錢21枚が横位置に重なり、土中に食いこんだ状態で出土した。

溝は調査区中央西北に設定した 6×3.2 m のグリッドで、江戸時代の畠上面下、約 1.2 m で検出した。江戸畠検出後、下層遺構検出の掘削時に湧水により壁が一部崩落した為、全面的な掘り下げは危険と判断してグリッド調査とした。溝は東西方向のもので北壁のみ検出した。北壁は東へ向かうにつれ、徐々に北へ振っていく。溝の深さは約 70cm。埋土は上から黒灰色粘質土、黒灰色砂土、黒灰色粘土である。後述する遺物のほとんどは黒灰色砂土中に含まれていた。調査区東壁断面においては溝の北壁を、また調査区南壁断面においては溝の南壁をそれ

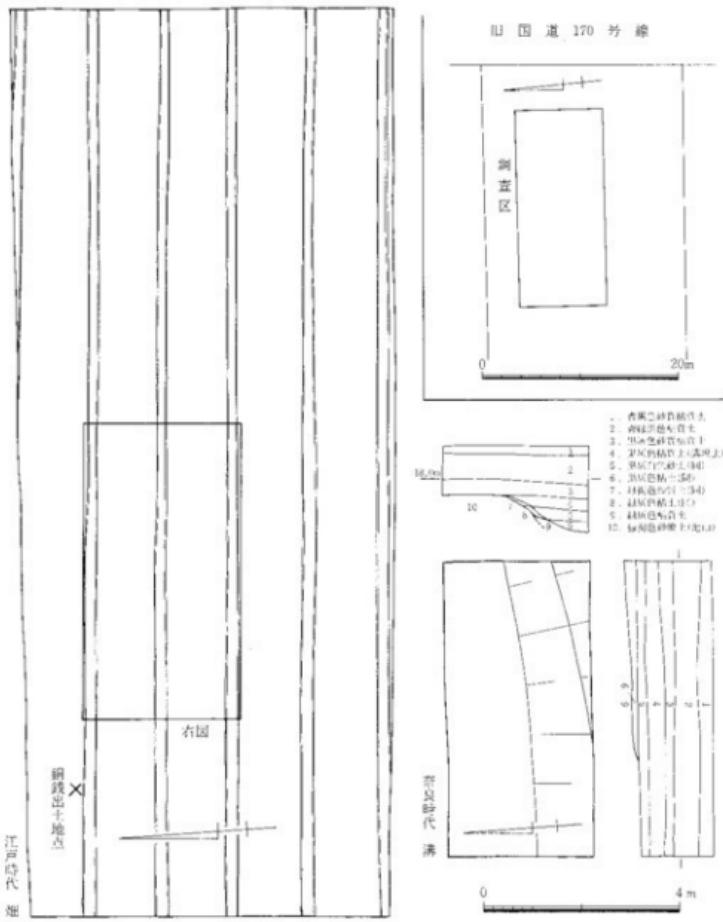


図-2 遺構図

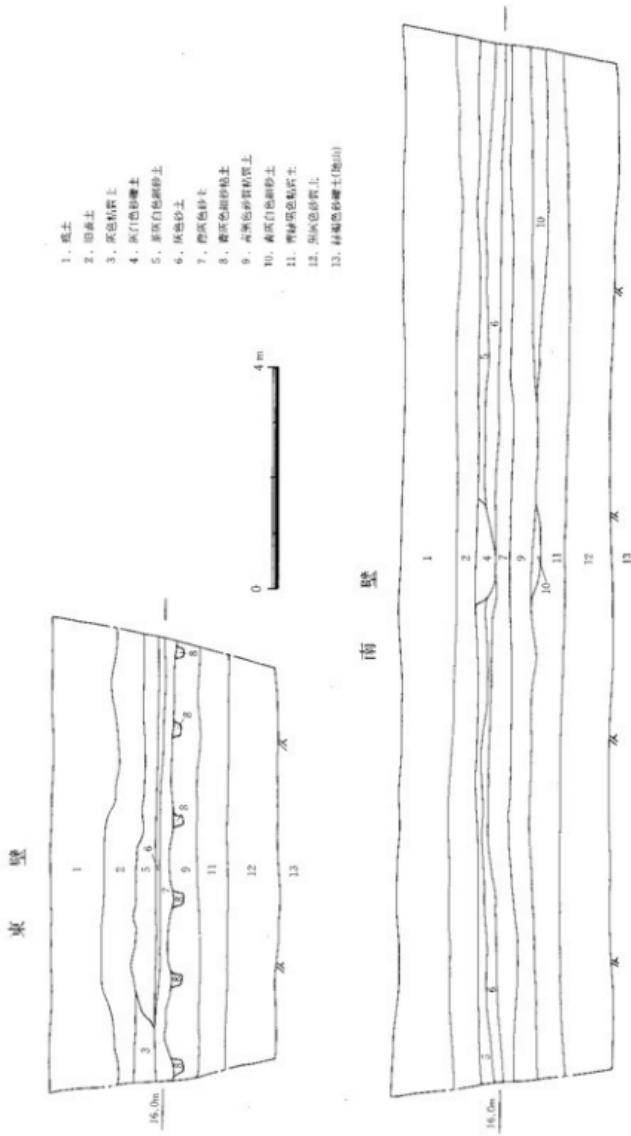


图-3 调查区东壁·南壁断面土层图

それ見い出すことができず、溝の埋土と同質の砂質土の堆積が見られた。このことから溝より小河川と考えた方がよいのかもしれない。

4. 遺物

遺物として、須恵器、土師器、瓦、銅錢の出土があった。

土器類は第5層以下、すべての層から出土したが細片であるため図化できない。図示したものはすべて溝埋土、黒灰白色砂土からの出土である。

1～5は高台を有する須恵器杯である。1は口径17.6cm、器高5.6cmを測る。外方にはり出す低い高台を底部外寄りに貼りつける。底部外面は回転ヘラケズリを行なった後、ナデを施す。口縁部は外反ぎみに立ちあがり、回転ナデによる調整を行なう。底部内面にはナデを施す。2はやや丸みをおびた底部に外方にふんばる高い高台をはりつける。体部の外面は回転ナデ。3は底部より真下にのびる断面方形の低い高台を底部外寄りにはりつける。底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ、底部内面はナデである。底部径7.0cmの小形の土器である。4は断面の低い高台をやや外に向かって、底部外寄りにはりつける。底部外面は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ、底部内面はナデを施す。5は断面方形の高台を底部外寄りにはりつける。器壁は厚い。底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデを施す。底部内面には自然釉がかかる。

6は須恵器壺である。現存高19.5cm。肩部以上を欠く。体部は回転ヘラケズリを施し、上方は不整方向のナデ。体部内面は回転ナデによる調整を行い、重ねてナデも施す。体部下半には粘土の麻目が残存する。内面には空気泡による凹凸が多い。体部外面上半と底部内面には灰の降着がみられる。

7・8は土師器杯。7は口径14.4cm、器高3.8cm、色調は淡赤褐色を呈し、丸みをおびた底部と内寄する口縁部からなる。口縁端部は内傾する。底部外面にはヘラケズリを施す。内面には1段の放射状暗文を施す。8は口径14.6cm、器高3.0cm、色調は淡赤褐色を呈し、平坦な底部と斜め上方にたちあがる口縁部からなる。口縁端部は内側にまきこみ丸く肥厚させる。底部外面にヘラケズリを施す。内面の暗文はない。

9は土師器皿である。口径16.4cm、器高2.4cm、色調は淡赤褐色を呈し、平らな底部と短くのびる口縁部からなる。端部は外反しながら丸くおさめている。底部にはヘラケズリを施した後、不整方向のナデを施す。部分的に指頭痕も残る。

10は土師器壺である。口径8.5cm、器高5.0cmを測り、淡赤褐色を呈する小形の土器である。体部には部分的に不整方向ナデを施すが、整形時の凹凸が残存する。口縁部は外反し、底部は中央を窪ませる。胎土に雲母、小砂を含む。

11・12は土師器壺である。11は口径13.3cm、器高10.4cm以上。色調は赤褐色を呈し、体部は丸く、口縁は外反する。口縁部は横ナデ、体部外面は不整方向のナデを施すが、整形時の凹

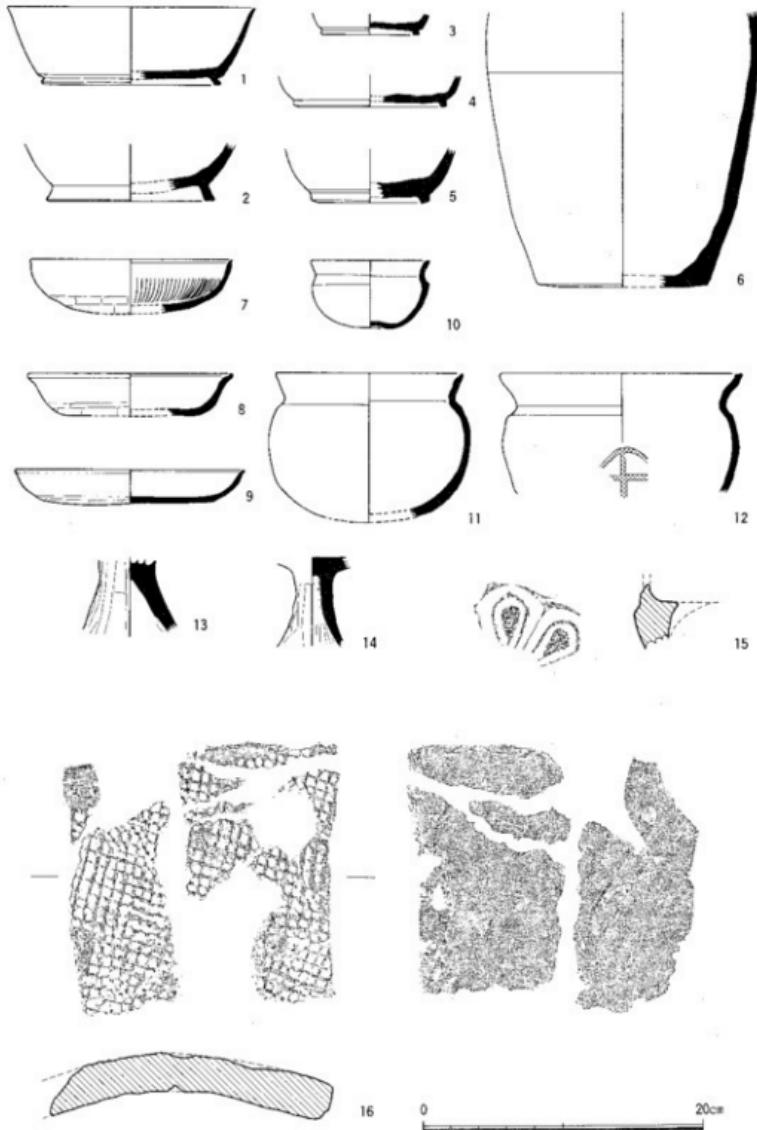


図-4 出土遺物実測図

凸が残る。体部内面は板状工具によるナデを施す。12は口径17.2cm、器高8.4cm以上を測る。口縁部径が体部最大径を上回る。色調は淡赤褐色を呈する。口縁部は上端が面をなす。横ナデによる調整を施す。体部は不整方向にナデする。また体部外面には墨書きみられるが下部の欠損や墨が薄いことから判読できない。「⊕」のようなものであろうか。

13・14は土師器高杯である。13は杯部、脚部幅を欠く。脚部は中空で、外面はヘラケズリにより16面の面取を行う。内面はナデによりしばりめを消すが整形時の指頭痕を残す。14は杯部と脚部との接合部と脚部上半を残す。脚部は中空で、ヘラケズリにより外面を軽く面取りした後ナデする。内面にはしばりめが残る。

15は単弁8集蓮華文軒丸瓦である。弁は8葉のうち2葉が残る。肉厚であり各々界線により区画されている。瓦当裏面には印籠つぎのための溝がほりこまれている。

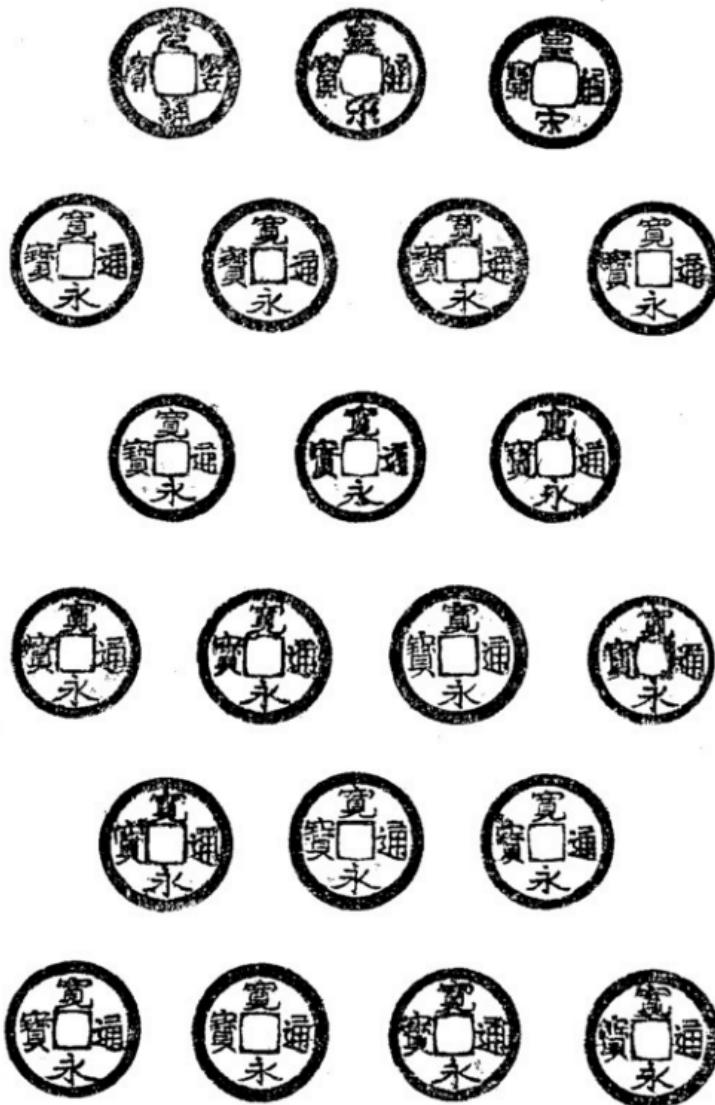
16は平瓦である。表面（凹面）は9～8本/cmの布目痕が残り、その上からヘラ状工具で部分的に斜方向に削る。裏面は細かい格子目の叩き工具により叩きしめている。叩く方向はやや斜め方向で、一定ではない。叩き原体の幅は遺物表面の剝離が著しいため不明である。また横端面には分割界線、分割面が残る。このことよりこの平瓦は桶巻作りによるものと考えられる。また表面の端面より数cmは削り（横端面）やナデ（前後端面）による整形を行う。

溝出土の遺物は8世紀代を中心とするものが多い。

銅錢は江戸時代畠の畠に食い込んだ状態で出土した。総数は21枚。内訳は元豊通宝1枚、皇宋通宝2枚、寛永通宝18枚である。寛永通宝については比較的鋳上がりがよく、また著しい摩滅、錆化も受けていない。

5.まとめ

柏原市域において、東高野街道（旧国道170号線）を境としてその東側と西側では土層の安定度に違いがみられる。調査件数の多い少ないはあろうが、過去の調査状況からみると、東側では比較的安定した土層であるのに対し、西側では不安定な上層の状況を示す。当然のことながら、古大和川の氾濫の影響を幾度となく受けていることに起因する。しかし今回の調査地において、そうした厳しい自然環境、条件下の土地でも人々が生活していたことを知る遺構が確認できた。江戸時代という比較的新しい時期の遺構（畠）ではあったが、東高野街道以西の遺跡のあり方を知る上でも、大きな成果であった。



圖－5 出土銅錢拓影 (1 : 1)

II 87-1次調査

- ・調査地所在地 柏原市太平寺2丁目543-1、他
- ・調査期間 1987年3月16日～4月8日
- ・調査面積 255 / 1625m²
- ・調査担当者 竹下 賢

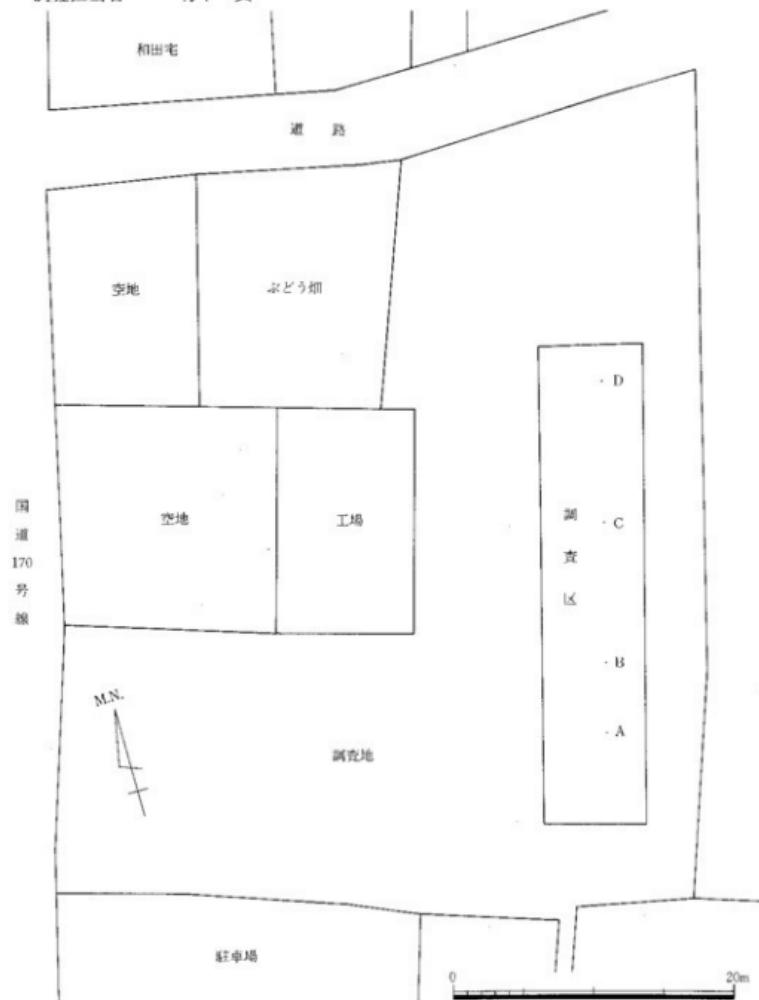


図-6 調査区位置図

I 調査概要

本調査は、柏原市太平寺2丁目におけるマンション建設に伴なう緊急発掘調査である。1987年1月24日の試掘調査によって、現地表下約2mに7世紀代を中心とする良好な遺物包含層が存在し、その下層にピット遺構が検出されたため発掘調査を実施することにした。調査はマンションの柱筋を中心に、幅7.5m×長さ34mの調査区を設定して実施したが、現地表下約1mに湧水の激しい灰黄色砂層があったために、途中にテラスを設けて排水の策を講じた上で二段掘りにする方法をとらなければならなかった。調査の結果、7世紀前半から8世紀中頃までのピット、溝、土坑等を検出し、また、上馬等の市内では珍しい遺物も出土した。なお、調査に要した費用は届出者である中野信一氏の負担による。

II 調査成果

1 層序

調査地の現状はぶどう畑であり、約1mの盛土がなされていた。盛土の下には川の氾濫によって形成されたと考えられる厚さ約30cmの灰黄色砂層（湧水層）がある。以下の層序は、図2に示すごとく、山耕土、灰黄色砂層、青灰色粘土層、黒灰色粘土層となり、各々、概して、水平かつ均一な厚さで調査区のほぼ全域に広がっている。黒灰色粘土層からは、中世の土器が出土している。その下層の黒灰色砂混粘質土層は、調査区南端近くでは層厚約6cmと薄く、遺物も少ないが、北へ行くにつれて厚さを増し、調査区北端近くでは層厚約60cmを測り、多量

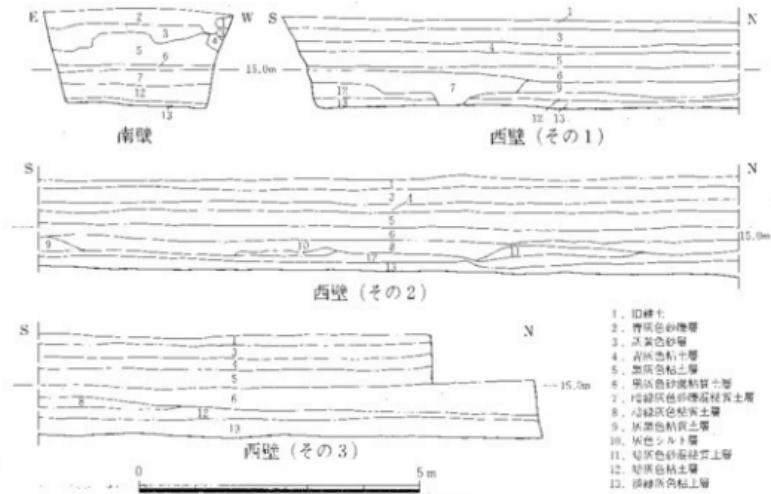


図-7 上層断面図

の遺物が出上した。以下は、調査区北寄りでは、暗灰色粘土層、淡緑灰色粘土層となるが、中央部以南では、暗灰色粘土層の上に、暗緑灰色粘質土層、灰黒色粘質土層が入り、やや複雑な堆積状況を示している。なお、黒灰色砂混粘土層以下、暗灰色粘土層までの各層は、いずれも6世紀後半から8世紀中頃までの遺物を含んでいる。

2 遺構

1) 黒灰色砂混粘質土層上面（第1面）検出遺構

調査区北寄りで、ピット2基を検出した。ともに、平面形は隅丸方形を呈する。ピット1から中世の土師器小皿片が1片出土しており、中世の建物の一部であると推定される。ピット間の距離は心々で1.94mを測る。

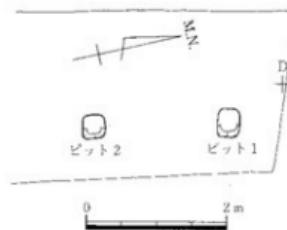


図-8 遺構平面図（第1面）

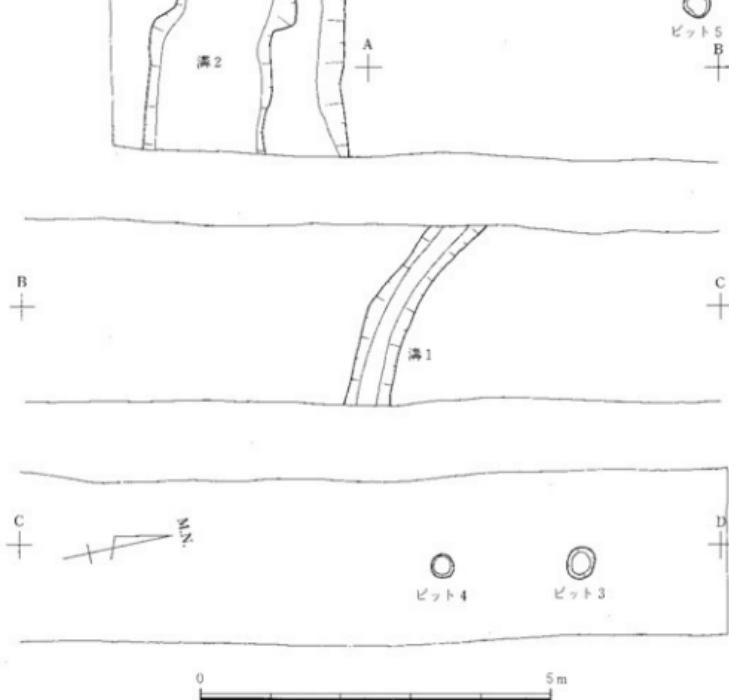


図-9 遺構平面図（第2面）

2) 黒灰色砂混粘質土層下面（第2面）検出遺構

黒灰色砂混粘質土層の下層は、調査区北寄りでは暗灰色粘土層であるが、中央部では暗緑灰色粘質土層、その南では灰黒色粘質土層が広がっている。ここでは、溝2条とピット3基が検出されたが、そのうち、ピット3、ピット4は暗灰色粘土層、溝1とピット5は暗緑灰色粘質土層、溝2は灰黒色粘質土層及び暗灰色粘土層を基底面としている。

ピット3、ピット4は調査区北寄りで、約2mの間隔を持って検出され、ピット5は調査区南寄りで検出された。いずれも平面形は円形を呈し、土師器の小破片を出土した。柱の痕跡は認められなかった。溝1は調査区中央部で検出され、弧状の平面形を呈する。深さ約10cm以下しか残存しておらず、上部は削平されたものと考えられる。土師器、須恵器の他、獸骨が出土しているが、いずれも小破片である。溝2は調査区南端で検出された。幅2.4～2.9mを測る。この溝は、堆積の状況から、人為的に埋められたものと考えられる。埋土内から土師器、須恵器、獸骨などが出土している。

各遺構とも時期を特定できる遺物は出土していないが、上層、下層とも8世紀中頃までの遺物を含んでいることから、8世紀中頃の比較的短い時期の遺構面であると考えられよう。

3) 暗灰色粘土層上面（第3面）検出遺構

調査区南端近くでピットを3基検出した。いずれも隅丸方形の平面形を呈し、一隅の柱穴と見られる部分が一段深くなっている。この柱穴間の心々距離は、ピット6一ピット7間、ピット6一ピット8間ともに、1.54mを測る。いずれのピットからも時期を特定できる遺物は出土していないが、8世紀頃の建物の可能性が強い。なお、これらのピットは、前述のピット4、ピット5と同一面上にあり、同時存在の可能性が考えられる。

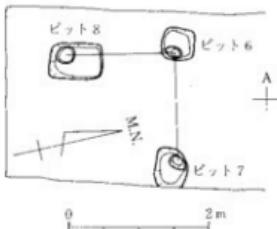


図-10 遺構平面図（第3面）

4) 暗緑灰色粘土層上面（第4面）検出遺構

ピット14基、溝1条、土坑1基を検出した。ピットには相關性を見出すことはできず、また、時期を特定できる遺物を出土したものもない。溝3は上部をほとんど削平されており、遺物は出土しなかった。土坑1は、調査区中央部で検出され、ピット13を切っている。長径約2.6m×短径約0.9mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測るが、北半は削平を受けている。埋土は大きく上層（1・2層）、下層（3・4層）、最下層（5層）に分けられる。下層の上面と下面是、ほぼ全面が木片で覆われていた。木片には木簡状の形態のものもあるが、多くは加工くずのような木片で、自然木、種子なども含まれている。木片には墨書きの認められるものはなかった。他の遺物には土師器、須恵器、獸骨、歯齒などがあるが、ほとんどが下層からの出土で、上層からは小破片のみが出土している。7世紀中葉頃の埋没と考えられる。

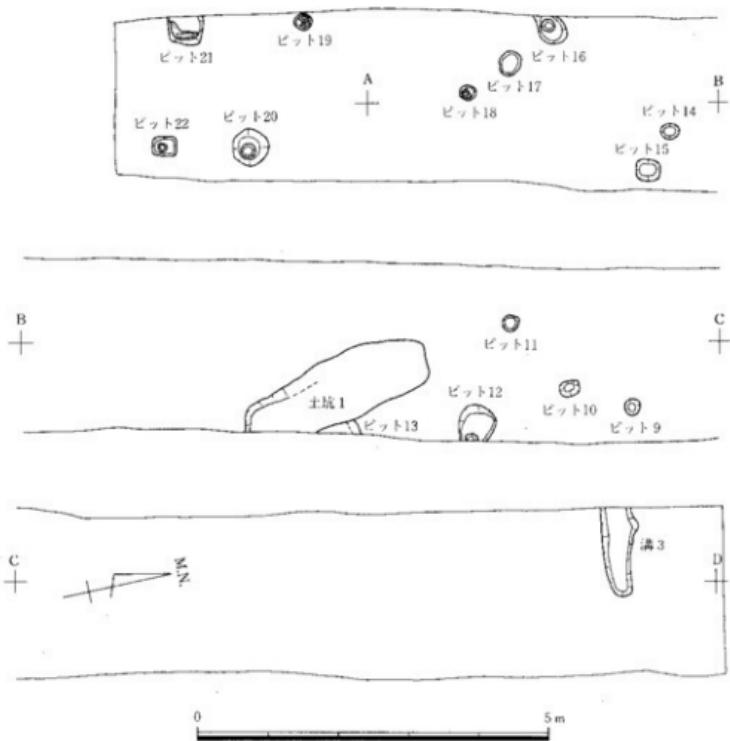


図-11 遺構平面図（第4面）

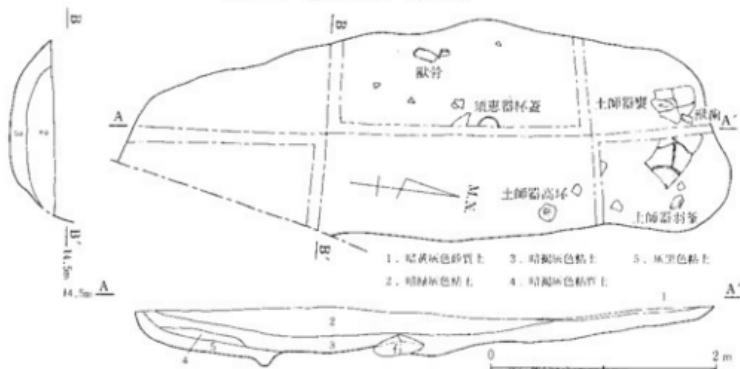


図-12 土坑1遺物出土状況図及び断面図

3 遺物

1) 遺構出土の土器 (図13)

遺構から出土した土器のうち図化できたものは、溝2出土の2個体（1・2）と土坑1出土の5個体（3～7）のみである。

1は土師器鉢。平底に近い丸底からゆるやかに立ち上がり、口縁端部はやや内側に肥厚して丸くおさめる。底部外面にはヘラケズリを施し、口縁部外面には粗いヘラミガキを施している。色調は暗茶褐色を呈する。2は土師器甕。復元口径11.0cmを測る小形器である。「ぐ」の字に外反する口縁部は端部を丸くおさめる。胴部内面上半に板状工具を用いたナデ調整を施している。外面には時に調整を施さない。

3は須恵器杯身。内外面とも回転ナデ調整。4は須恵器杯蓋。天井部はヘラ切りで、回転ヘラケズリは全く施されていない。胎土中に直径3mm以上の石英粒等を多く含み、須恵器としては粗い胎土である。5は土師器羽釜。「ぐ」の字に外反する口縁部の端部は外側に肥厚して、小さな玉縁状を呈する。胴部内面はナデ調整。口縁部内面の下半から胴部内面にかけて、一面に赤面顔料が塗布されている。羽釜棺に転用されていたものであろうか。いわゆる生駒西麓産

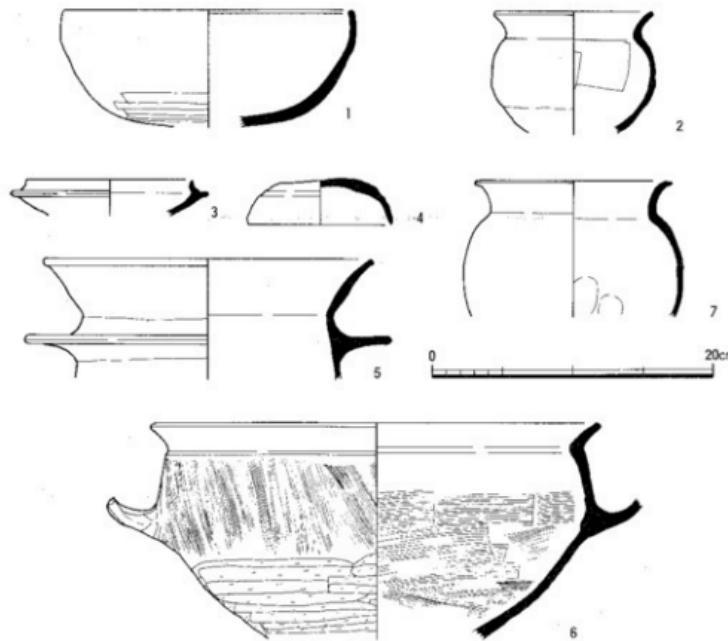


図-13 川土土器実測図 I

産の土器である。6は上師器把手付壺。把手の先端は欠損している。やや偏平気味の胴部の外面は、上半をタテ方向のハケ調整、下半を分割性のある整ったヘラケズリにより調整している。胴部内面はヨコ方向のハケ調整である。胴部内面の上位には、約2cmの幅で炭化物が付着している。7は土師器壺。「く」の字に外反する口縁部の端部を水平方向に引き出し、尖り気味におさめる。口縁部内面は板状工具によって、ヨコ方向にナデ調整した後、ヨコナデを施している。胴部内面は板状工具によるナデ。

土坑1出土の土器のうち、3は上層、4～6は下層、7は最下層からの出土である。土坑1からは、他にミニチュア高杯などが出土している。

2) 包含層出土の土器（図14・15）

包含層から多量の土器が出土したが、大半が黒灰色砂混粘質土層からの出土である。前述のとおり、遺物の層位の考察が不可能であるため、ここでは器種ごとに簡単に説明を加える。

須恵器は杯身（図14-1～9）、杯蓋（同10・11）、壺（同12・13）などがある。12は焼成が不良で、瓦質である。土師器は杯（同14～21）、皿（同22～24）、高杯（同25～30）、壺（同31）、壺（同32～34）、竈形上器（図10-1～7）などがある。杯には口縁端部を内側に肥厚させて丸くおさめるもの（14・15）と内傾させるもの（16～20）の2者があるが、量的には後者が多い。皿には口径8.8cmを測る小形器がある。外面には指おさえの痕が明瞭に残るが、それは、指尖によるものではなく、そろえた指全体でつつみ込むように押えたものである。内面が非常に平滑であることとあわせて、内型を用いているものと考えられる。高杯には小形（25・26）、大形（27）とミニチュア（28～30）がある。28・29はゆるやかに立ち上がる杯部を持ち、脚の端部を丸くおさめているが、30は直線的に開く口縁部の端部を指おさえにより波状に作り、脚は外に開き尖り気味におさめる。壺には、口縁端部を上方につまみあげるもの（32）と、水平方向に引き伸ばすもの（33・34）がある。竈形土器のうち、1は焚口上部の弯曲した部分、2・7は焚口底部、3は釜口である。1・2は曲げ庇系の竈、7は付け庇系の竈であると思われる。4～6は、釜口～焚口上部の破片で、釜口には同心円状圧痕がみられる。同心円状圧痕を持つ竈形土器は柏原市内でも多く出土しているが、今回出土したものは庇を持たないことが明瞭で、他に例を見ない。また、無庇の例としても、市内では鳥坂寺出土の1例に次ぐものである。胎土は、7を除いて、いわゆる牛駒西麓産の胎土である。他に、ふいごの羽口、鉄滓、取瓶（図版10）などの鋳造関連遺物も少量出土している。

なお、図15-5・7は黒灰色粘土層、図14-2・4・7～11・13～16・18・20・25・27・29～32、図15-1～4・6は黒灰色砂混粘質土層、図14-19・21・24は暗緑灰色粘土層、図14-6・22・28・34は灰黒色粘土層、図14-1・17・33は暗灰色砂混粘質土層、図14-3・5・12・23・26は暗灰色粘土層からの出土である。

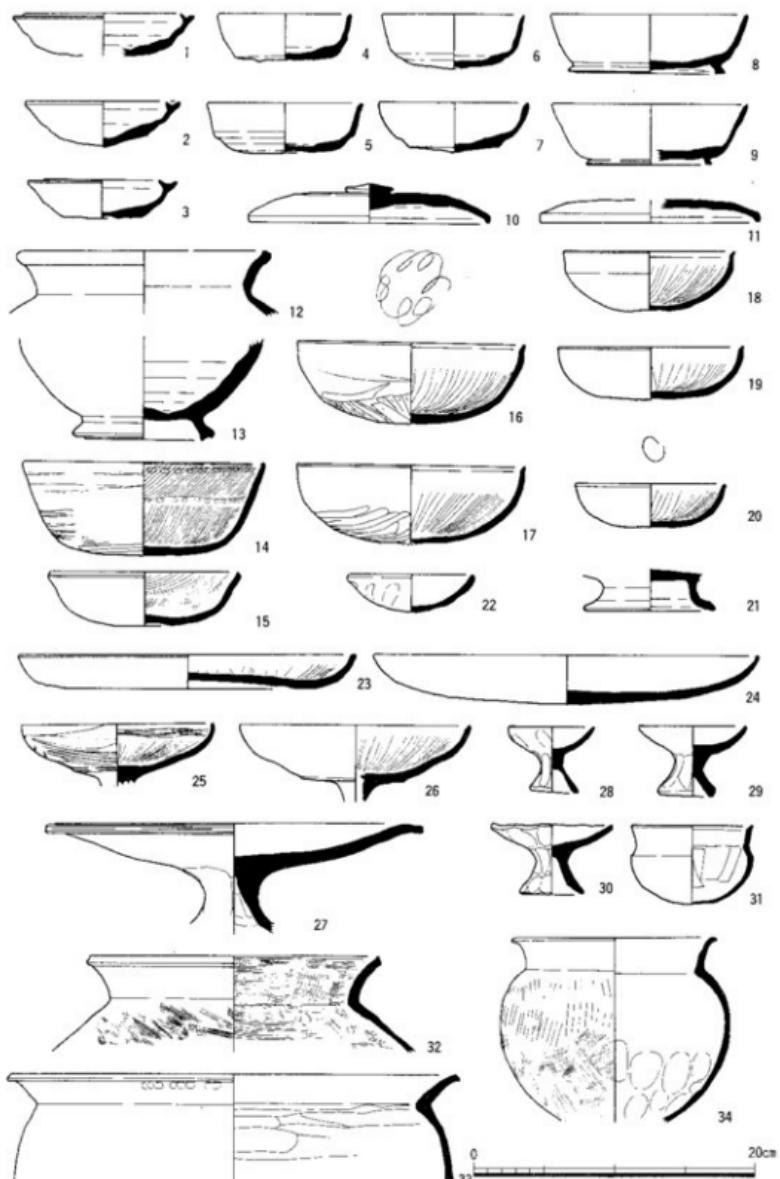


图-14 出土七器实测图II

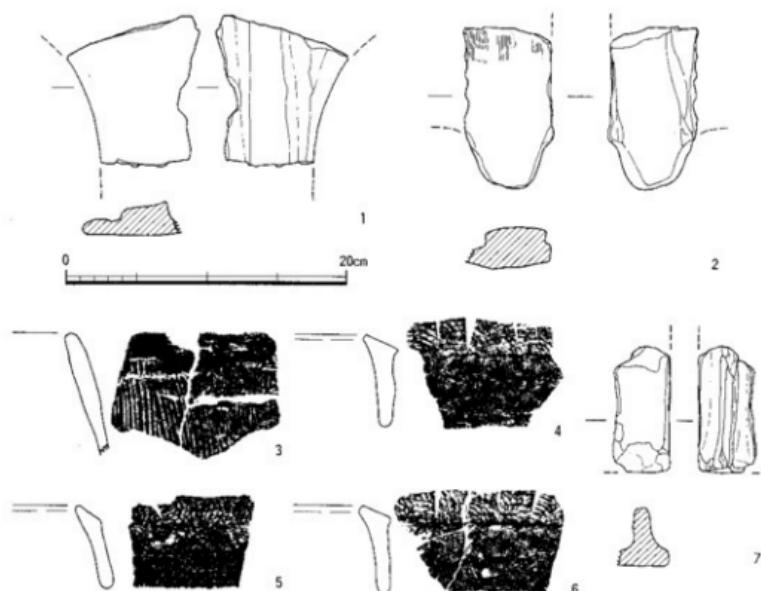


図-15 出土土器実測図III

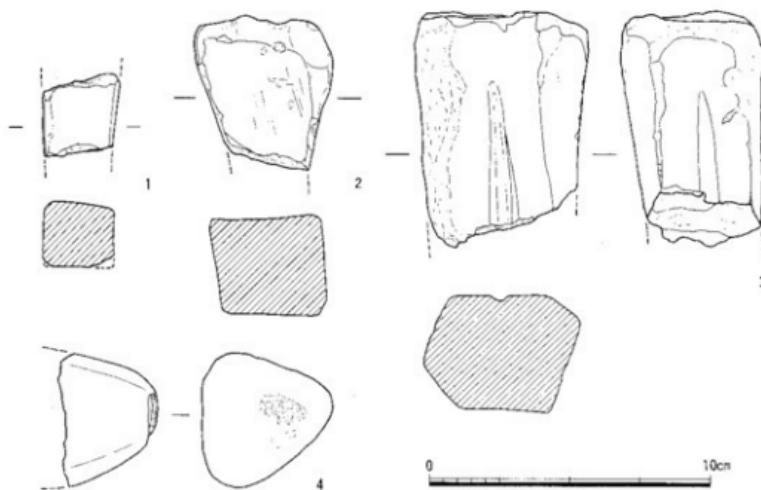


図-16 出土石器実測図

3) 石器（図16）

1～3は磁石。1・2は黄灰色流紋岩製で4側面とも磁石面として使用している。仕上げ砥である。3は灰緑色砂岩製で、断面は不正六角形をなし、5側面が磁石面として使用されているが、うち2面には溝がある。4は灰緑色砂岩製の叩石か？断面は隅丸三角形を呈する。いずれも灰黒色砂混粘質土層からの出土である。

4) 骨角器（図17）

鹿角製の刀子柄である。全長12.6cmを測る。数カ所に、柄を横断する方向の刻み目があり、また、何かを巻いた痕跡（図のアミ点部分）も認められることから、桿皮等を巻いて用いられたものと思われる。

5) 土馬（図18）

調査区北寄りの灰黒色砂混粘質土層で土馬が出土した。少なくとも7個体分以上ある。1は全長17.3cm、通高13.9cmを測り、2は残存長16.1cm、通高13.9cmを測る。1は脚1本を、2は脚3本と尾の先端を欠いている。ともに、断面椭円形で腹部を浅く溝状に窪ませた胸部に、断面円形の四脚と、尾、断面三角形の頭を接合し、耳を貼りつけた後、粘土円板を2つ折りにした顔面を接合し、指、ヘラで仕上げている。目は竹管によって表現している。3は断面ひょうたん形の首の先端にかぶせるように貼りつけた粘土で顔面と耳を成形している。目は竹管によって表現している。この形態の土馬は1個体のみの出土である。

6) まとめ

今回の調査では4面（調査区北寄りでは3面）の遺構面を確認したが、中世以降の可能性のある黒灰色砂混粘土層上面を除いて、以下の3面は7世紀後半～8世紀中頃までの短い時期のものである。8世紀中頃までの遺物を出土する包含層が周辺に広がっていることは従来の調査で知られているが、各層とともに時期幅のある遺物が混在している状況は今回の調査と同様である。今後の調査で各層の成形時期を細かく限定してゆくことに努めなければならない。また、調査区北寄りで土馬が数多く出土したが、市内の遺跡で、これほどまとまって土馬が出土した例はなく、注目される。土馬は疫病よけなどの祭祀に使われたものとされており、付近で祭祀が行なわれていたことが考えられる。

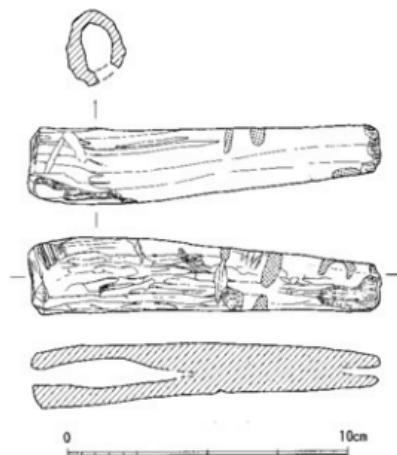


図-12 出土骨角器実測図

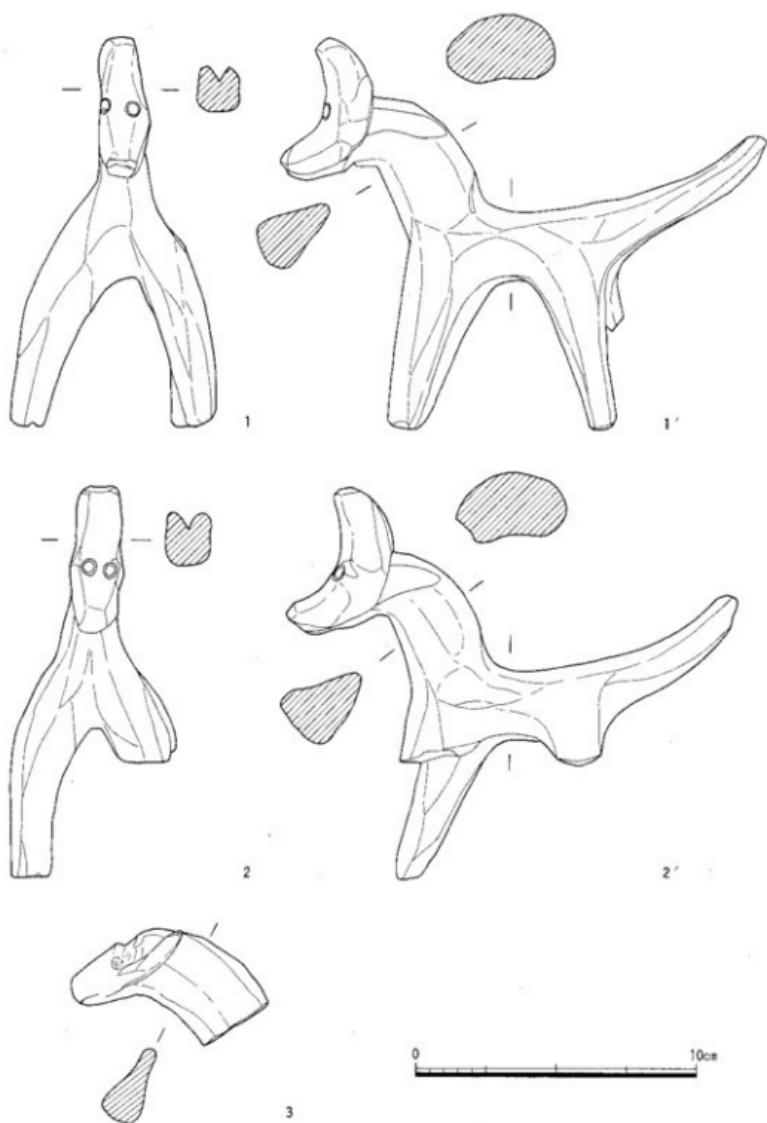


図-18 出土上馬実測図

第2章 安堂遺跡

87-1次調査

- ・調査地所在地 柏原市安堂町967
- ・調査期間 1987年1月26～31日・2月20日～3月2日
- ・調査面積 405 m²/780m²
- ・調査担当者 石田成年

1. 調査に至る経過

柏原市安堂町において共同住宅建築の計画があり、それに伴う発掘届出書が当市教育委員会に提出された。教育委員会では数度の協議後、調査依頼をもとに発掘調査を実施した。まず、1987年1月26日から31日にかけて、対象地南西隅の浄化槽予定地に東西10.5m、南北3mの調査区（I区）を設定し、橙褐色土（第3層、遺物包含層）直上までを重機により、以下を人力により掘削した。その結果、現地表下1mで7世紀後半～末葉の掘立柱建物となる柱穴群を検出した。教育委員会ではその結果をふまえ、建物予定地全域において調査が必要であると判断し、その旨を依頼者に伝えたところ、盛土施工により基礎盤面を上げ、遺構に影響を及ぼさないよう慎重に工事を行うと回答があった為、工事に際して立会調査を行うことを条件に工事を認めた。しかし基礎掘削に立会ったところ、柱穴群や土器類が多く検出された為、工事を止め、同年2月20日から3月2日までI区と同様の方法で調査を実施した（II区）。なお、



図-19 調査地位置図（方位は真北）

調査に要した諸費用は全て依頼者である中辻信太郎氏の負担である。

2. 位置と環境

当該地は大和川と石川との合流点から北西へ約 500m、古大和川の右岸氾濫原に臨む、扇状地性の低地上にあたる。標高は約18.5mで、合流点の大和川水面よりも低い位置にある。生駒山地南端西麓にあたる当該地周辺には、河内と大和の接点という要衝の地であったことから、古代史上注目される遺跡も多く存在する。特に飛鳥、奈良時代には東高野街道沿いに寺院が建ち並び、河内国の中心地として栄華をきわめた地である。当該地の東北にはその「河内六寺」の一つである知識寺が、また東南には同じく家原寺が位置する。また孝謙天皇行幸の際の宿泊施設として『続日本紀』に登場する「知識寺南行宮」が知識寺と家原寺の間、つまり当該地も含む、約200 m四方の範囲内に推定されている。³³⁾

当該地周辺でここ数年のうちに実施された主な発掘調査として、太平寺・安堂遺跡³⁴⁾ - 4 次調査、同³⁵⁾ - 1 次調査、安堂遺跡³⁶⁾ - 2 次調査がある。83 - 4 次調査では 6・7 世紀代の建物跡、8・9 世紀代の古墓等が確認されている。85 - 1 次調査では 5 世紀後半の掘立柱掘形、8 世紀代の溝等を検出した。85 - 2 次調査は当該地の北側隣接地において1985年12月から翌年2 月まで実施されたマンション建設に伴う発掘調査で、弥生時代の溝・土塁、8 世紀代の掘立柱建物等の検出、5 点の木簡の出土があった。

註 1. 『柏原市史』

塚口義信「竹原井領宮と知識寺南行宮に関する二、三の考察」『古代史の研究』

第4号 関西大学古代史研究会 1982 他

2. 柏原市教育委員会『太平寺・安堂遺跡 1983年度』 1984

3. 柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報 - 大県遺跡、太平寺・安堂遺跡 - 1984年度』 1985

4. 柏原市教育委員会『安堂遺跡 1986年度』 1987

3. 遺構

調査は前述のように浄化槽部（約30m²）と基礎部（約370 m²）の2度に分けて、それぞれ橙褐色土（第三層、遺物包含層）直上までを重機（II区においては一部で遺構面、つまり第4層、茶橙褐色土直上まで）、以下を人力により掘削、精査した。基本層序は上から茶灰色砂質土（表土・耕土）、灰色砂質土、橙褐色土、茶橙褐色土、灰褐色粘質土の順である。

遺構として、掘立柱建物2棟、掘立柱柱列5条、中世土塁1基、中世井戸1基を検出した。掘立柱柱穴の遺構面の標高は約18mで85 - 1 次調査地の遺構面より約2 m高い。調査地中央でやや高くなっているものの、全体的にはほぼ平坦である。

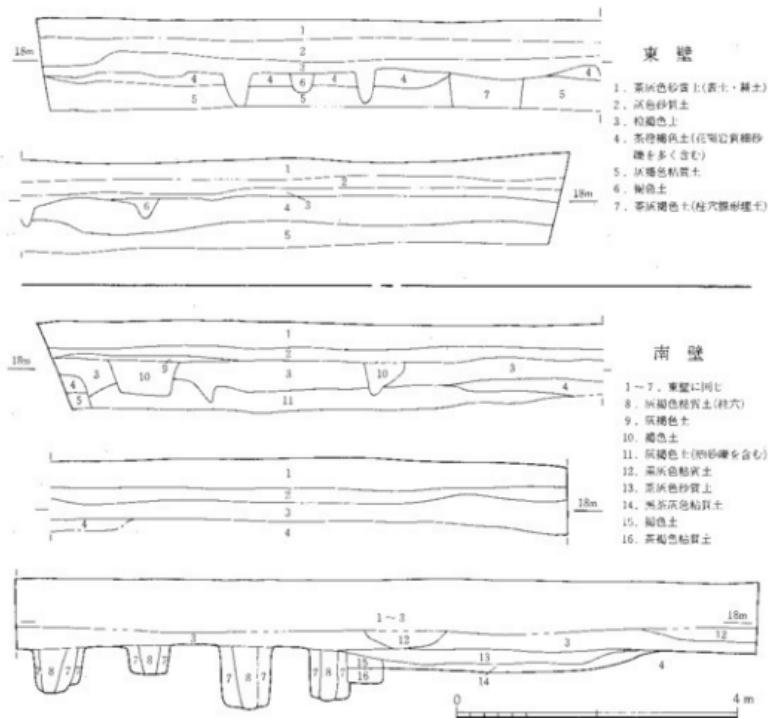


図-20 上層図

・掘立柱建物 1

調査II区の中央東に位置する桁行4間以上(8.9m)、梁行2間(5.4m)、の東西棟で東側は調査区外へのびる。柱間寸法は桁行2.1~2.3m、梁行は北から3.0m、2.4mである。柱穴の掘形は、一辺70~150cmの隅丸方形を呈し、直徑20~30cmの柱痕跡を遺す。深さは50~70cmを測る。北辺西から2つ目の掘形は中世土塁により破壊され、底部を残すのみである。

・掘立柱建物 2

調査I区の東半に位置する桁行3間以上(3.7m)、梁行1間(1.5m)の絶柱建物で東側と南側はそれぞれ調査区外へのびる。柱間寸法は桁行1.2m等間である。柱穴の掘形は一辺40~70の隅丸方形を呈する。平面形、大きさは不ぞろいである。直徑20~30cmの柱痕跡を遺す。深さは40~90cmとこれもまちまちである。後述する掘立柱柱列3と重複するが、切り合っていない為、その時間的前後関係は不明である。



图-21 遗構平面图

・掘立柱柱列 1

調査II区の北辺で検出した5間（全長9.9m）の東西柱列である。柱間寸法は1.8～2m。掘形は一辺50～90cmの隅丸方形で、直径20cm前後の柱痕跡を遺す。深さは35～70cmを測る。掘立柱柱列2が一部重複して東に、掘立柱柱列3が南にそれぞれ続く。

・掘立柱柱列 2

調査II区の北辺で検出した6間以上（12m以上）の東西柱列である。東側は調査区外へのびる。柱間寸法は2.1mではば等間。掘形は一辺50～70cmの隅丸方形で、直径20cm前後の柱痕跡を遺す。深さは50～65cmを測る。西で1.5間分、掘立柱柱列1と重複する。東で、掘立柱柱列4と直交するが時間的前後関係は不明である。

・掘立柱柱列 3

調査II区の西辺で検出した7間以上（15m以上）の南北柱列である。南側は調査区外へのびる。柱間寸法は1.8～2.6mとまちまちである。掘形は一辺50～90cmの隅丸方形で、直径20cm前後の柱痕跡を遺す。深さは15～70cmを測る。

・掘立柱柱列 4

調査II区の東北隅で検出した3間以上（6.0m以上）の南北柱列である。北側は調査区外へのびる。柱間寸法は南から2.0～2.2～1.8mである。掘形は一辺70cm前後の隅丸方形で、直径20～30cmの柱痕跡を遺し、深さは55～70cmを測る。掘立柱柱列1、柱列2とそれぞれ直交するが時間的前後関係はわからない。建物の可能性もある。

・掘立柱柱列 5

調査II区中央東南寄り、建物1の南側に検出した4間（全長7.4m）の東西柱列である。柱間寸法は1.5～2.4mと不揃い。直径20～30cmの柱痕跡を遺し、深さは40～50cmを測る。

いずれの建物、柱列について、根石等をもつものは認められなかった。

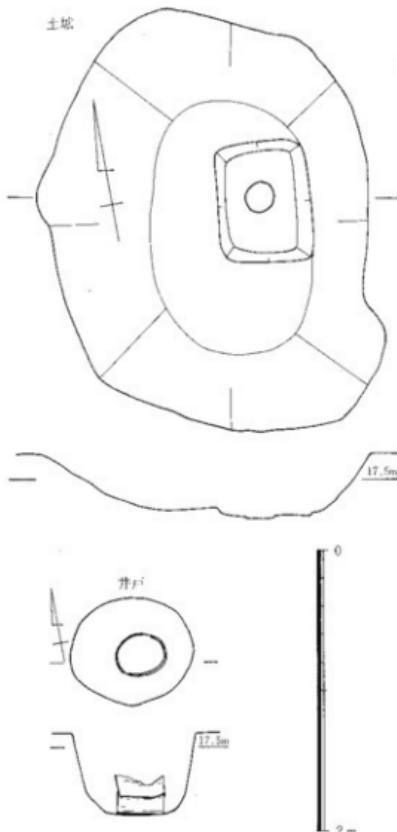


図-22 中世土塙・井戸

・中世土塙

調査II区の中央東寄りに検出した東西2.3m、南北3.0m、深さ45cm以上の土塙である。瓦器、土師皿が多く出土した。

・井戸

調査II区の南西、掘立柱柱列3の東に検出した、掘形直径80~90cm、深さ70cm以上を測る井戸である。下底部に径30~35cm、高さ15cmの曲物を2段重ねにして置く。

4. 遺物

出土遺物として、須恵器、土師器、瓦、繩文土器、弥生土器、埴輪、石器、土製品、石製品、瓦器がある。大半が遺物包含層からの出土である。量的には須恵器、土師器が多く、時期的には7世紀後半から末葉にかけてのものが割合として多い。

・須恵器

器種として、蓋、杯、平瓶、壺、鉢等がある。

1~6は蓋。1は器高3.0cm、口径10.1cm。かえりの端部が口縁よりも突出する。2・3はかえりの端部が口縁より突出しないもの。3はほとんど消失している。4、5は丸くおさめる。6は平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなる壺A蓋。つまみ部を欠損するため形状は不明。

7~13は杯。高台がつかないもの(7~10)とつくもの(11~13)がある。7は口縁端部が肥厚し、外反ぎみに伸びる。外面底部はヘラ切り後未調整。8~10は口縁端部が肥厚し、そのまま直立する。内外面に丁寧なナデを施す。

14は平瓶。肩の張った体部の中央寄りに大きく開く口縁部をつけたもの。把手はつかない。

17の壺は平底で斜め上に立ち上がる胴部のみ残す。おそらく平坦な肩に短く直立する口縁が続くのであろう。18は卵形の胴部に耳状の把手が付く。頸部の細い口縁部がつくようである。

19は内凹しながら立ち上がる口縁をもち、口縁端部は平坦である。外面はナデ後ヘラミガキ。

20は器高21.1cm、口径29.2cmを測る比較的大型のもの。平たい底部に外方に直立する体部がつく。口縁端部は平坦。色調は灰色で、焼成はやや軟質。体部外面下部は回転ヘラケズリで他は丁寧なナデ。体部外面を3等分する位置に2~3条の凹線がめぐる。

21は中空円筒窯の把手であろう。青灰色を呈し、胎土は密である。把手はヘラケズリにより面取りされる。把手下部に自然釉がつく。焼成に際し、窯面を下に向けていたためであろう。

・土師器

器種として、蓋杯、碗、皿、高杯、甕、羽釜、壺、鉢、鍋などがある。

22は偏平なつまみを持ち、口縁部、体部が偏平で内側に肥厚する。外面は丁寧なヘラミガキ。23~33は杯。23~25は底部外面をヘラケズリし、口縁部にヘラミガキを施す。内面には2段

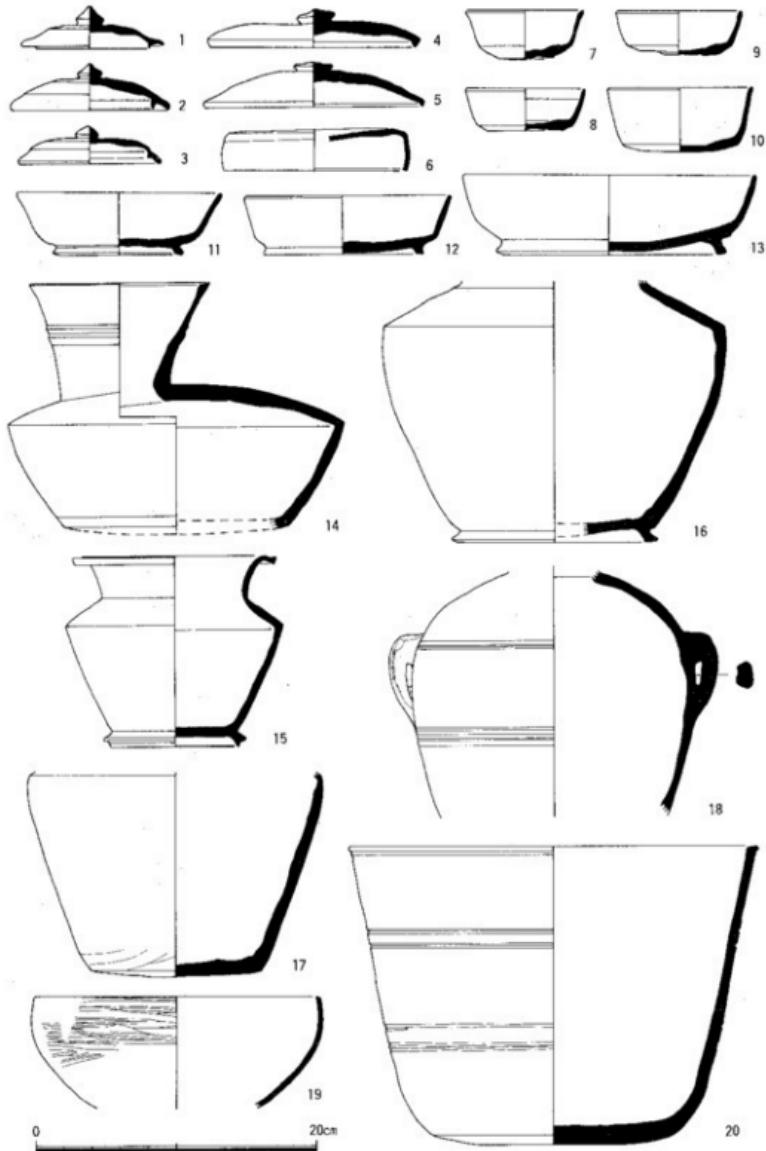


図-23 出土土器 (1)

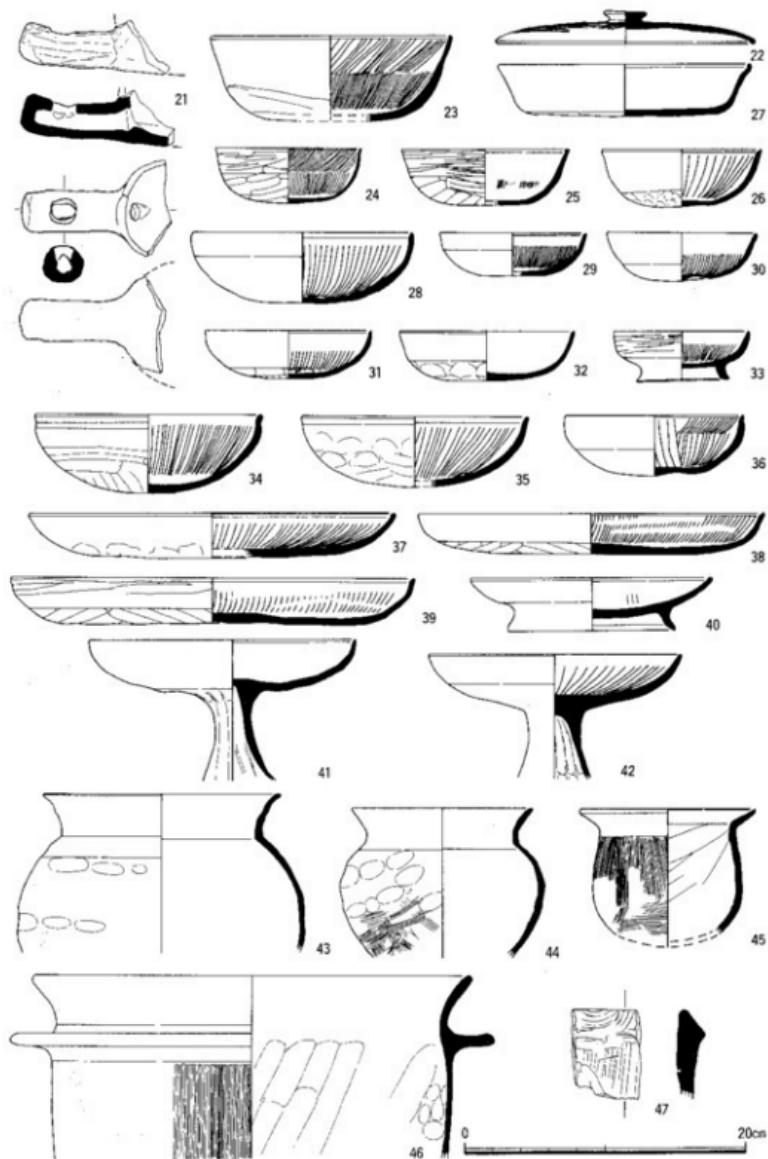


図-24 出土土器 (2)

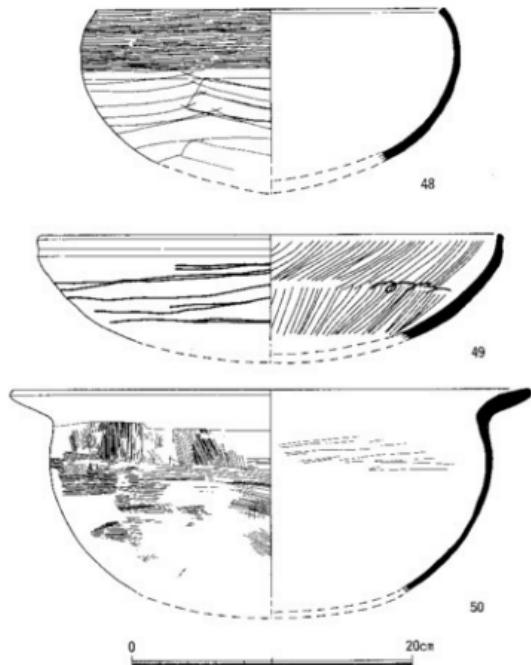


図-25 出土土器（3）

の放射状暗文。27はケズリのち不整方向にナデした底部にやや外に開く口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込む。33は小型の杯に外側にふんばる高台がつくもの。内面に放射状暗文。出土した杯Aの口径は9.7~18cm、器高2.2~6.2cm。杯Cの口径9.7~17cm、器高2.7~5cm。

34~36は椀。34は丸みを持った体部の外面下半をヘラケズリし、上半はヨコナデ。口縁端部は丸く、やや外反する。内面には放射状暗文と見込みに螺施状暗文。

37~40は皿。37の口縁端部はわずかに巻き込む。38、39の口縁端部は真直ぐ伸びる。3者とも内面に放射状+螺施状暗文。40は口径17.3cm、器高2.9cmの皿に外にはり出す高台が付く。皿Aについては口径21.8~26.2cm、器高2.3~3.8cmのものが多い。

41、42は高杯。两者とも脚部端部を欠く。体部は内湾ぎみに立ち上がる。41に暗文はない。

43~45は甕。前2者は球形の体部からく字状に外反する口縁部へと続く。外面はナデや指押え。内面はナデの調整。45は端部が上方につまみ上がった口縁を持つ。外面は主として縦ハケ、内面は部分的にケズリ、のちナデる。

47は甕の釜口部分。端部外側に同心円文の圧痕が残る。

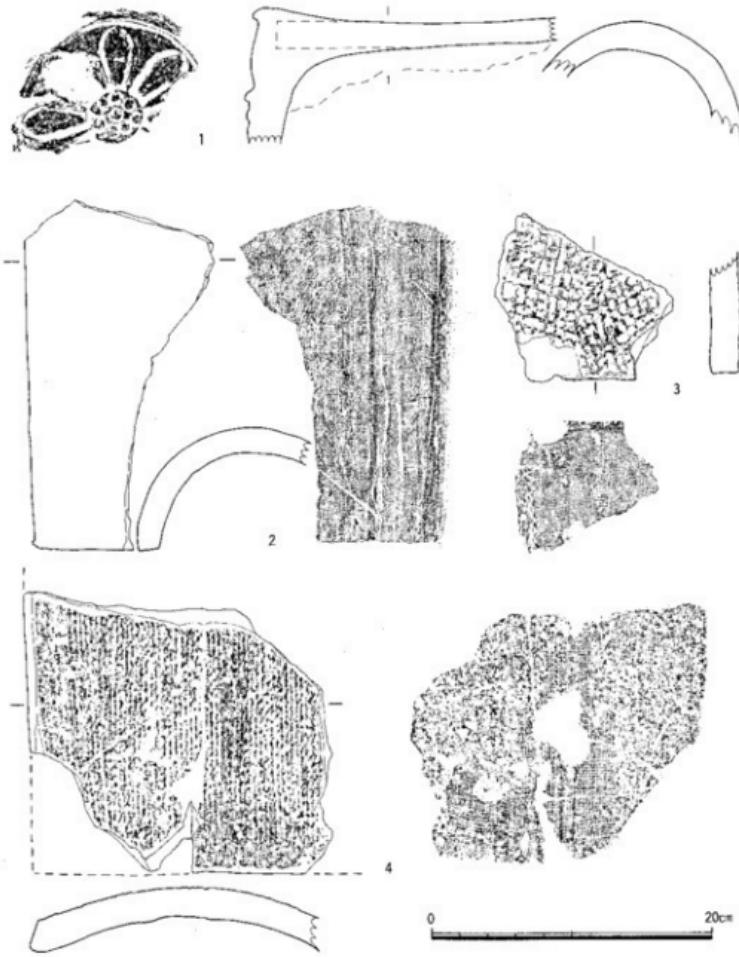


図-26 出土瓦

48は鉢。口径24.8cm、残存高10.9cm。体部は大きく内弯し、口縁端部は平坦。体部下半はヘラケズリ、上半から口縁部にかけては特にヘラミガキを施す。暗文はない。

・瓦

1は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。瓦当下半を欠く。復原瓦当径15.6cm、中房径4.0～4.5cm、中房部での瓦当厚2.8cm。弁、中房とも肉厚で、中房には1+8の蓮子を配する。色調は灰色、胎土は密で小砂粒を含む。過去に知識寺跡から同范らしきものが出土している。(堅下小学校蔵)

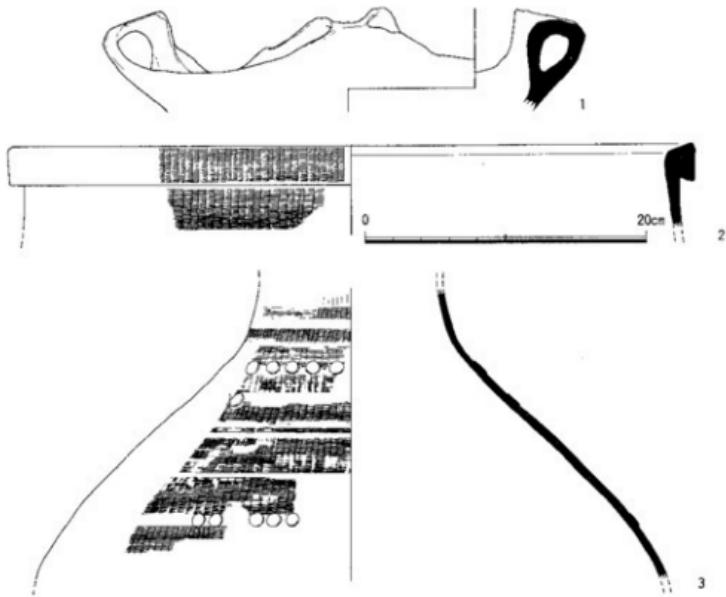


図-27 出土縄文・弥生土器

・縄文・弥生土器

1は縄文土器。後期の深鉢になろうか。装飾は四方につくものと思われる。色調は淡い茶褐色で胎土は粗く、1mm前後の石英・長石・くさり砾を極めて多量に含む。2は弥生の鉢である。段状口縁を持ち、口縁と体部は簾状文で飾られる。3は太頸壺の体部上方。円形浮文、簾状文で飾られる。2・3とも茶褐色の色調を呈する、いわゆる生駒西麓産のものである。両者とも弥生中期に属するものであろう。

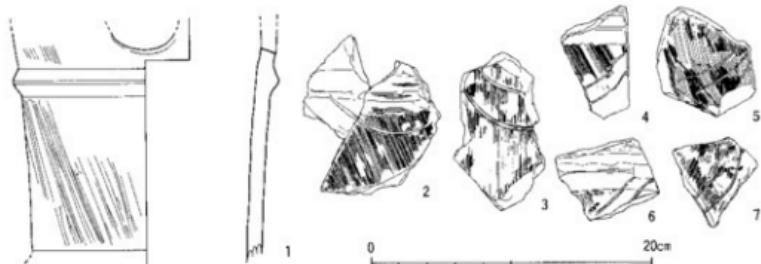


図-28 出土地輪（1）

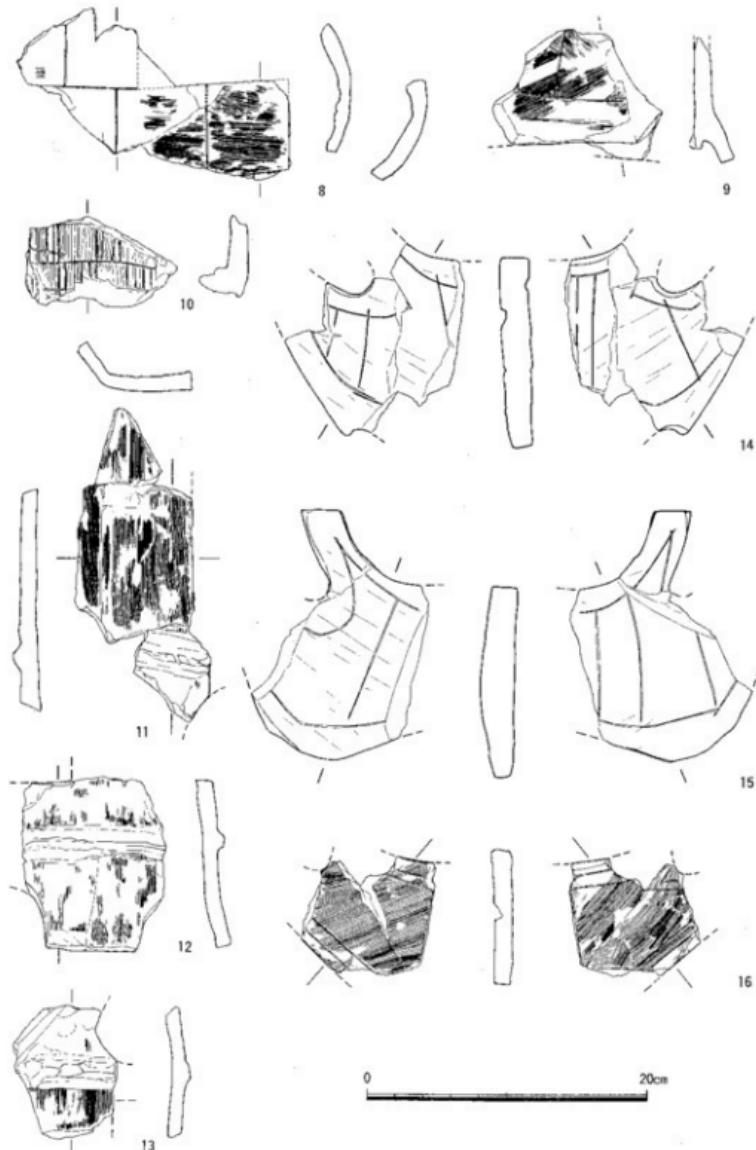


図-29 出土埴輪（2）

・埴輪

1は須恵質の円筒埴輪。淡い灰色を呈する。突帯は低く、三角形の断面を呈する。外面は斜めのケズリ、内面はタテ方向ケズリ+指押え。円形の透しがある。2～7は線刻を持つ円筒埴輪片。8～13は家形埴輪。8～10は屋根部分である。11は建物のコーナー部分、12は最下段で断面三角形の突帯がめぐる。接地部分には半楕円状のくり込みが、突帯の上段には窓になるのか方形の透しがあく。13は建物妻部の最上部であろうか。左上に斜め方向の貼りつけ痕が残る。おそらく屋根部が取りつくのであろう。14～16は蓋形埴輪。板状の両面に弧線からなる線刻文様がある。14、15は両面ともナデ調整、16はハケ調整を施す。16は硬質で、淡灰褐色を呈する。

・石器・土製品・石製器

1はサヌカイト製の石槍。先端部を欠損する。重量は48.8g。2はサヌカイト製の石鎌。重量は4.8g。3は土鍤。一方の先端を欠く。重量は9.8g。4は緑泥片岩製の片刃の石庖丁。半分は欠損する。5は滑石製の紡錘車。直径は4.5cm、中央の穿孔径は0.5cm。上方斜面部に細線で線刻された鋸歯文が11単位認められる。三角形の内側は格子で埋める。下方斜面部にも鋸歯文がかすかに認められる。6は滑石製の石鍋。底部のみ残す。ケズリ調整痕が明瞭に残る。

・土壤・井戸出土土器

先述の上器・瓦・埴輪等が遺物包含層からの出土であるのに対し、これら中世土器のみ遺構に伴うものである。1～3は瓦器椀。断面三角形の高台が付く。調整は外面はナデと指押えの

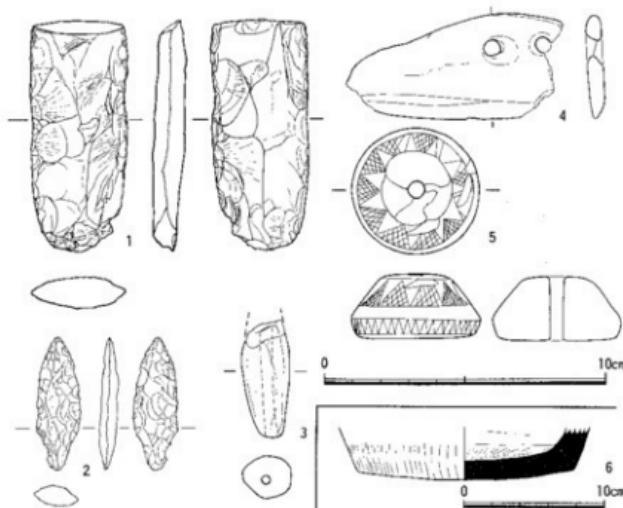


図-30 出土石器・土製品・石製品

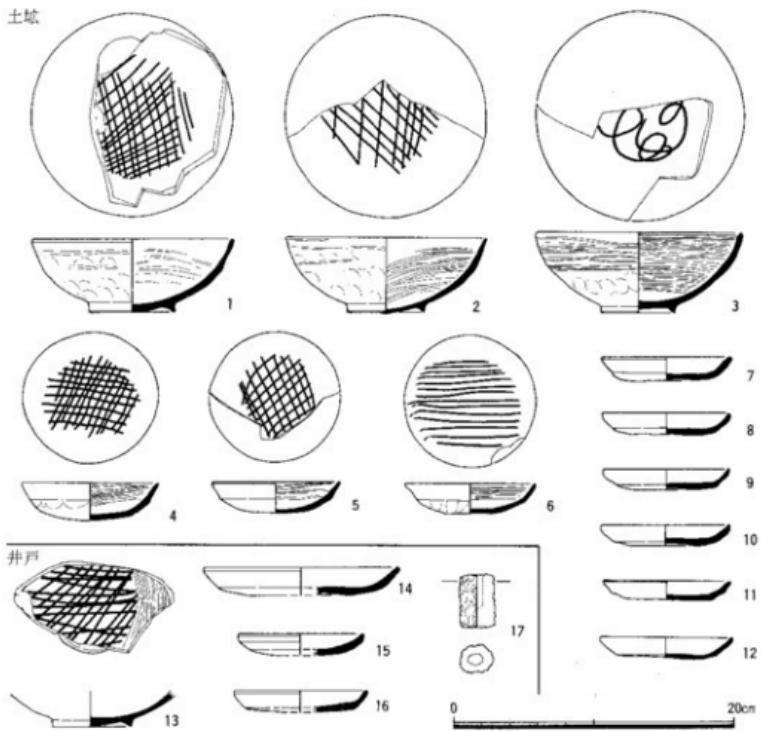


図-31 土塙・井戸出土土器

後、上半に粗いヘラミガキ、内面は丁寧なミガキ調整で1、2は見込みに格子状暗文を、3は螺旋状暗文を施す。3は口縁端部内側には細い沈線が一条めぐり、軽い段をなしている。4～6は瓦器皿。外面はナデと指押え、内面はミガキで見込みに格子状暗文。7～12の土師小皿は内外面ナデ調整。13の瓦器皿は底部のみ残す。内面はヘラミガキ、見込みに格子状暗文を施す。17は鹿角製品。径1.2cm、深さ2.5cmの孔を穿つ。用途は不明。土塙・井戸出土の土器については12世紀後半の年代を与えることができよう。

5.まとめ

今回の調査では遺構として、掘立柱建物とそれを囲む柱列（櫛）、中世の井戸等を検出した。また遺構に伴うものは微量であったが、縄文から平安にいたる各時代の多種多様な遺物の出土をみた。

掘立柱建物1は大きな柱穴掘形をもつ東西方向に長い建物である。調査区から東へのびるようである。それを囲むように柱列1・2が北に、柱列3が西にL字状にとりつく。過去の周辺地の発掘調査等においても調査地の西を南北に走る道路以西では顯著な遺構の存在が知られないことからも、この柱列3が遺跡の内を限っていたことは、ほぼ間違いないであろう。では、これら3条の柱列（櫛）により画された建物の性格についてであるが、今回は遺跡の面積に比して狭小な調査区において、建物のわずか一部を検出したにすぎず、それについて言及することは難かしい。そこで隣接する86-2次調査地に目を向けてみたい。調査成果については概要報告書にゆずるとして、遺跡の性格を考える上で特に注目すべきは4点の荷札木簡の出土であった。調査担当者はそれらが平城宮において廃棄されることなく荷材とともにもたらされたことから「調査区あるいは周辺には公的な荷材を扱うべき性格をもった施設が存在した」と考え、また検出した建物が8世紀前葉にはすでに建てられていたという状況と櫛で西縁を区切られた敷地の一部から木簡を出土している点からその建物を「庶民の住居、もしくは有力者の邸宅等ではなく、（付略）知識寺の付属施設として捉えることが妥当なようと思われる。」としている。今回、そういう施設、建物の存在を積極的に裏づける資料を見い出すにはいたらなかった。しかし柱列（櫛）により画された、比較的大きな掘形をもつ建物の存在は注目でき、それが何らかの中心的な建物であったと考えられる。

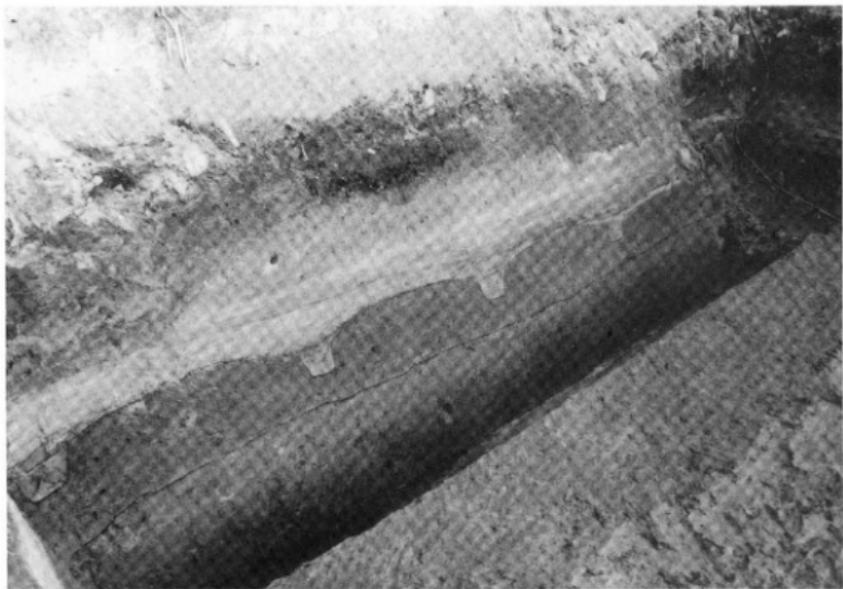
建物1の柱穴掘形からは右図の1・2が、柱列3の掘形からは同じく3の土器が出土している。土器からは、建物1については7世紀末葉、柱列3については7世紀後半を上限とする時期が与えられよう。建物1については、86-2次調査の建物との相関関係の有無を直接的には知りえないが、時期的にみると共存していたようである。柱列3については、出土土器は上限を示すものにすぎず、設置時期については建物1と同時期の可能性があると考えておきたい。柱列1・2からは良好な遺物の出土がないが、建物1と時期的に隔絶するものではないと思われる。

以上のように今回検出した建物、柱列については7世紀末葉を上限とする時期のものと想定した。しかし、包含層出土という制約はあるが、多量に出土した土器、瓦類から、遺跡としては7世紀中頃から継続的に営まれていたことが知れる。知識寺の創建が7世紀中頃から後半にかけてと推定されることから、それらは知識寺を背景として存在していた施設、建物からもたらされたものと考えられよう。そうしたことから、当該地や86-2次調査地でみられた施設についても、その担当者が示した「知識寺の付属施設」との理解が最も蓋然性が高いものと思われる。詳細については、今後、遺跡の中心地と思われる当該地の東一帯で調査が実施された時に、改めて考証の機会を持つこととした。

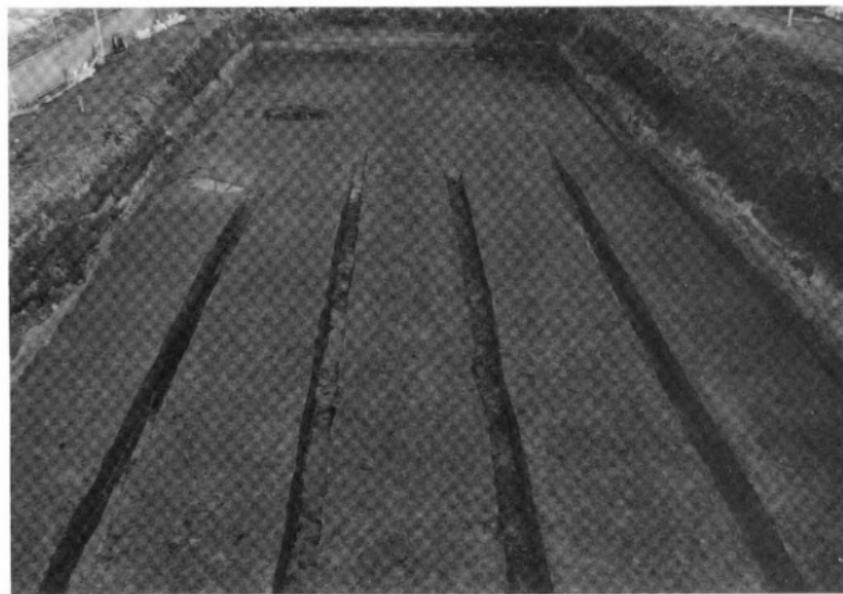


図-32 建物・柱列出土土器

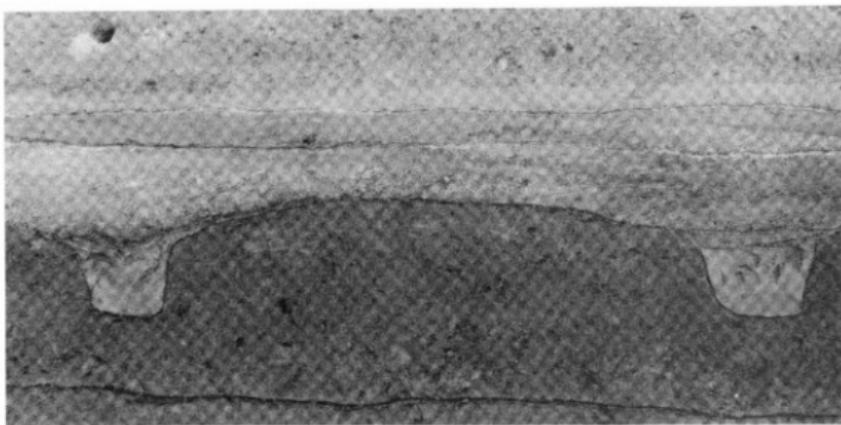
図 版



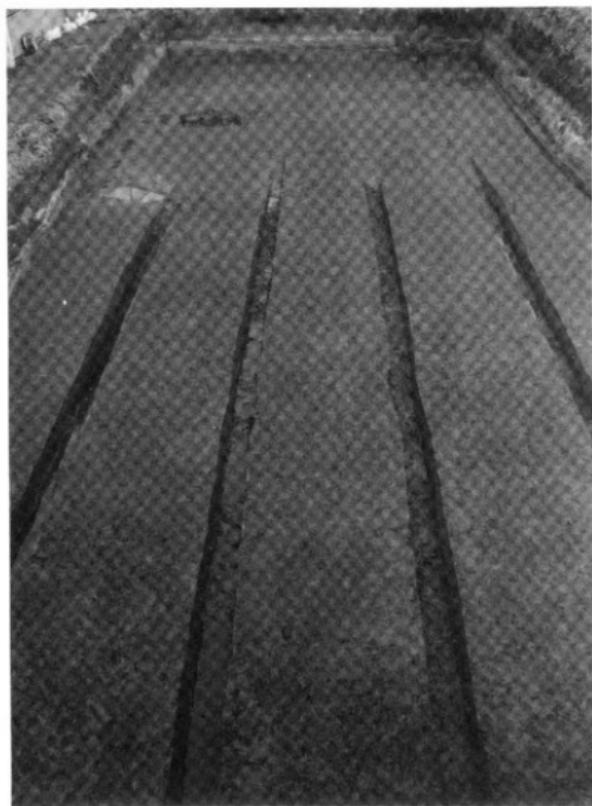
東壁断面



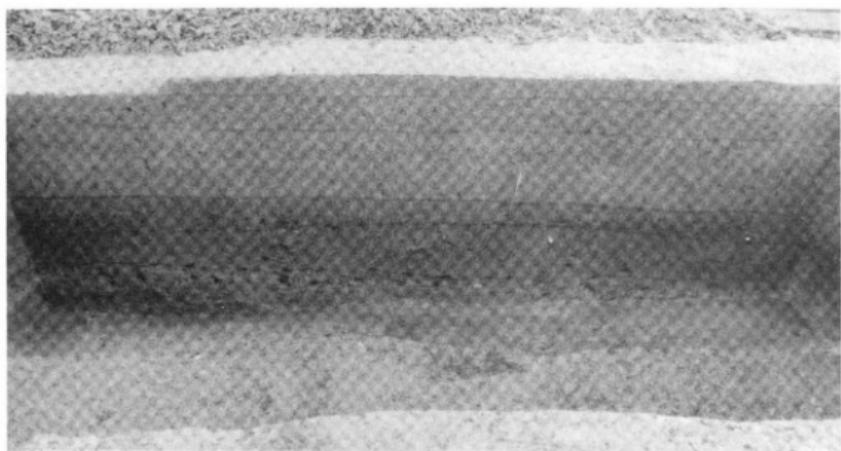
全景(西から)



試断面



江戸焼全景（西から）



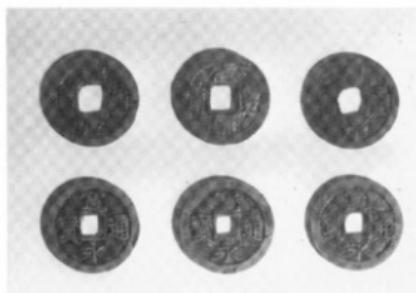
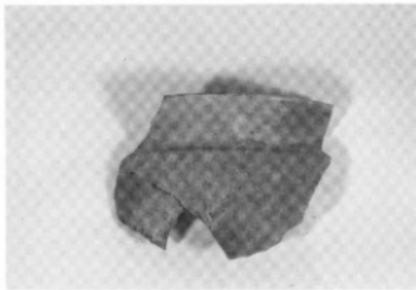
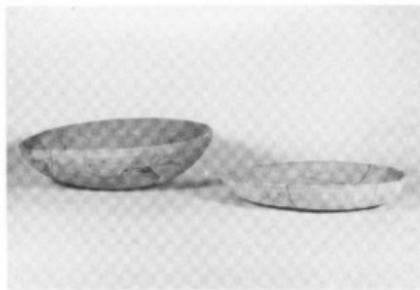
溝土層（北から）



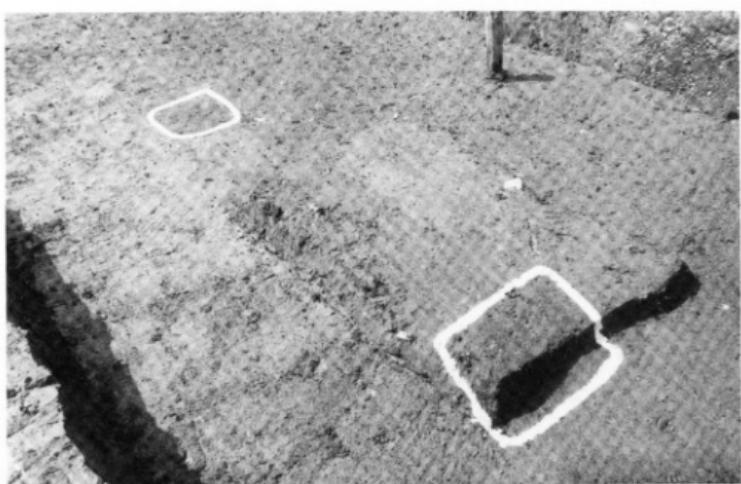
溝全景（西から）



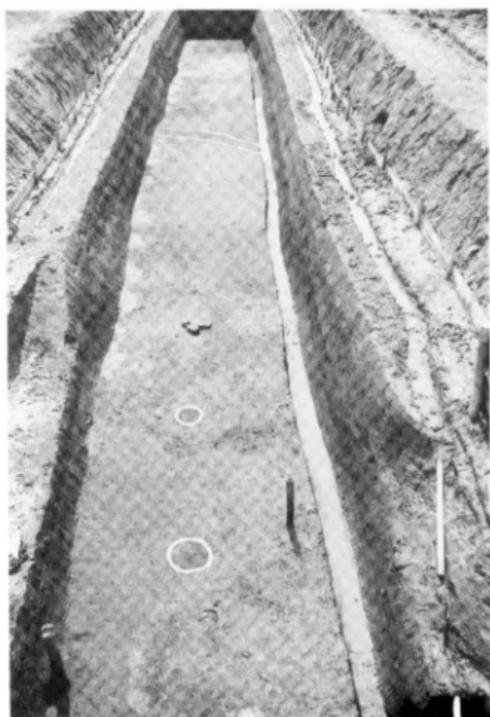
作業風景



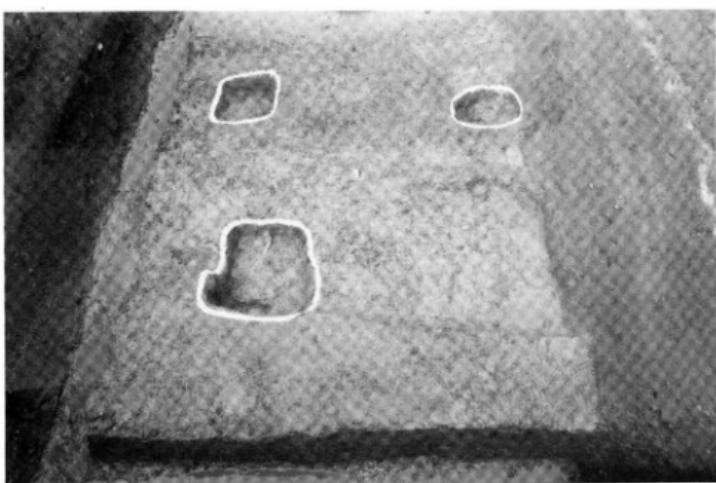
出土遺物



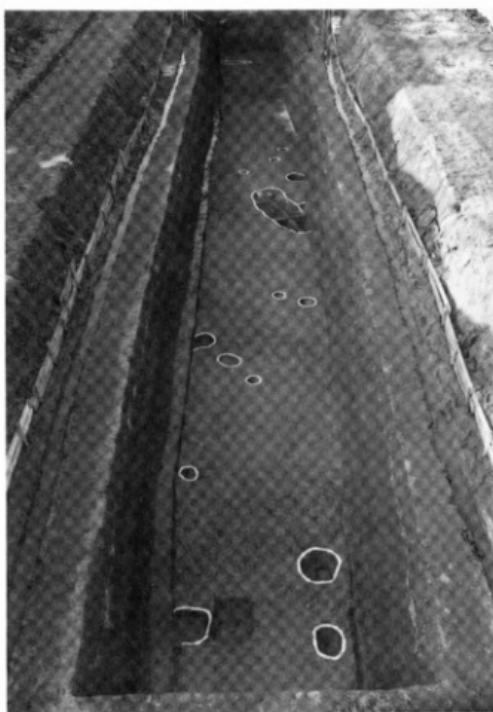
第1面（北東から）



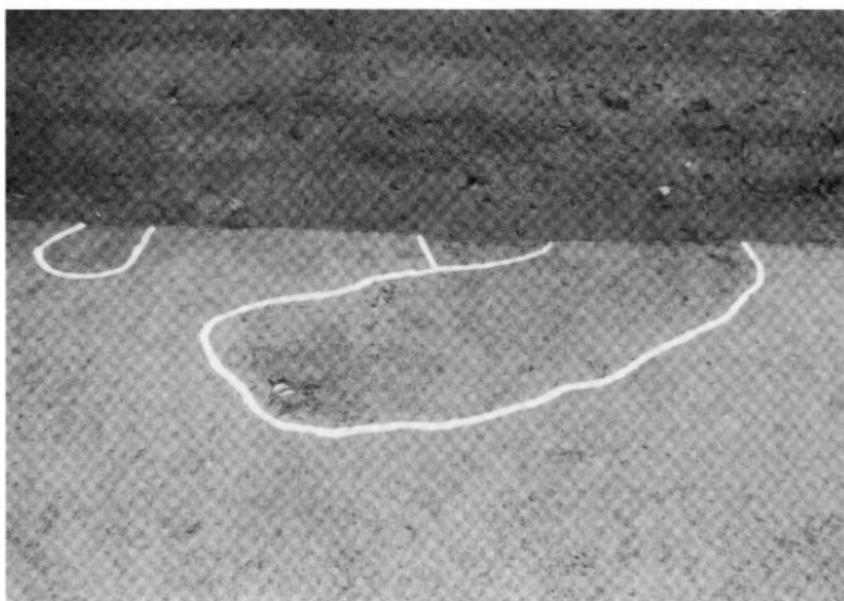
第2面（北から）



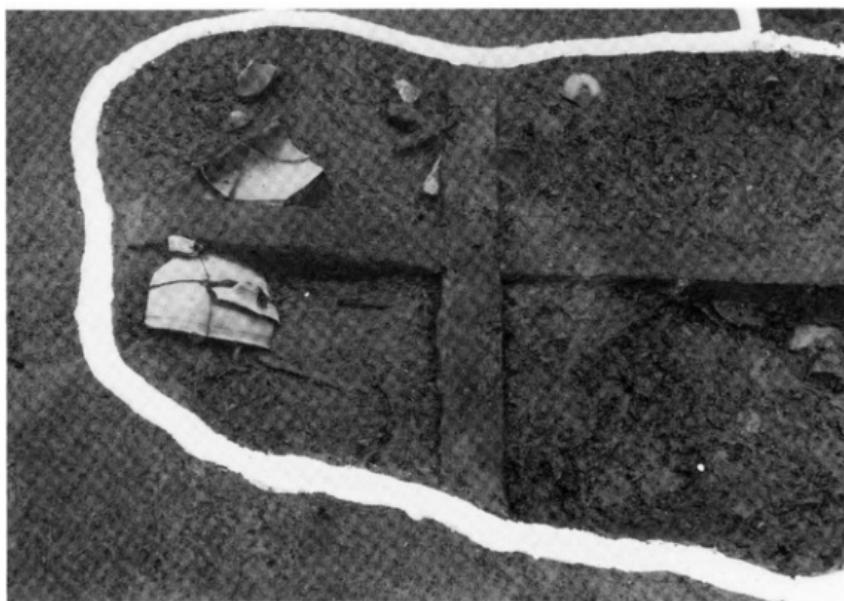
第3面（南から）



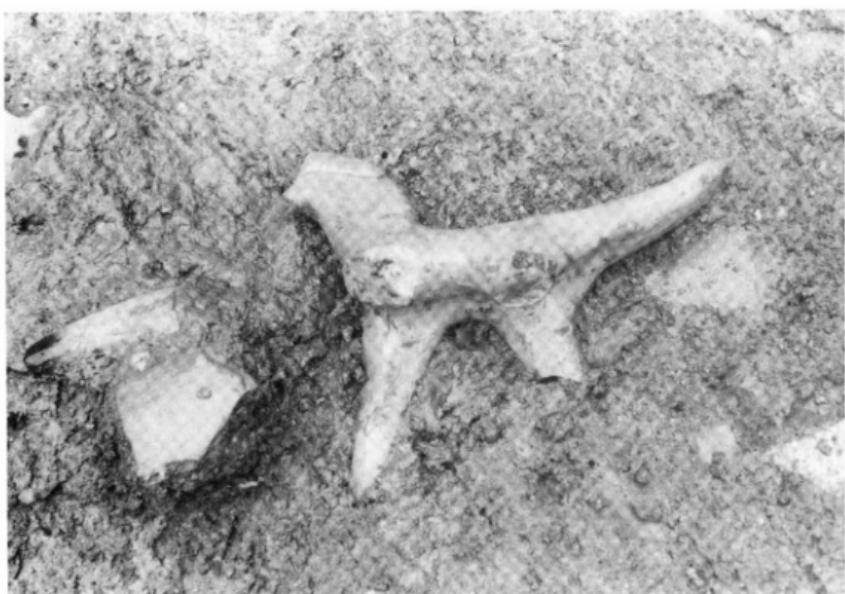
第4面（南から）



土坑1（西から）



土坑1遺物出土状況（西から）



土馬出土狀況



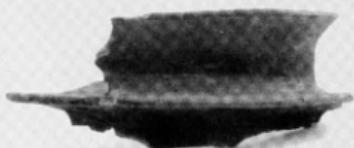
土馬出土狀況



4



6



5



5'

土坑1出土土器



2



4

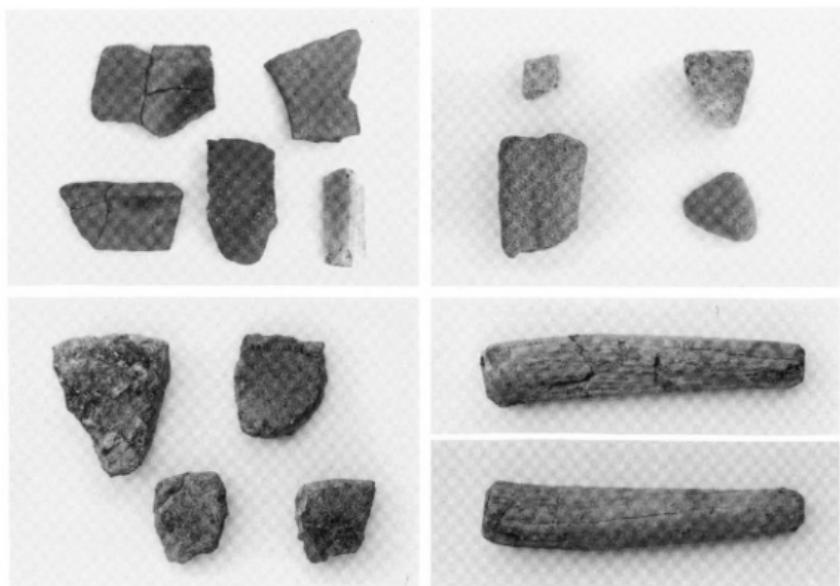


8



16

包含層出土土器



包含層出土土器、石器、骨角器



包含層出土土馬



18



22



25



28



29



30



31



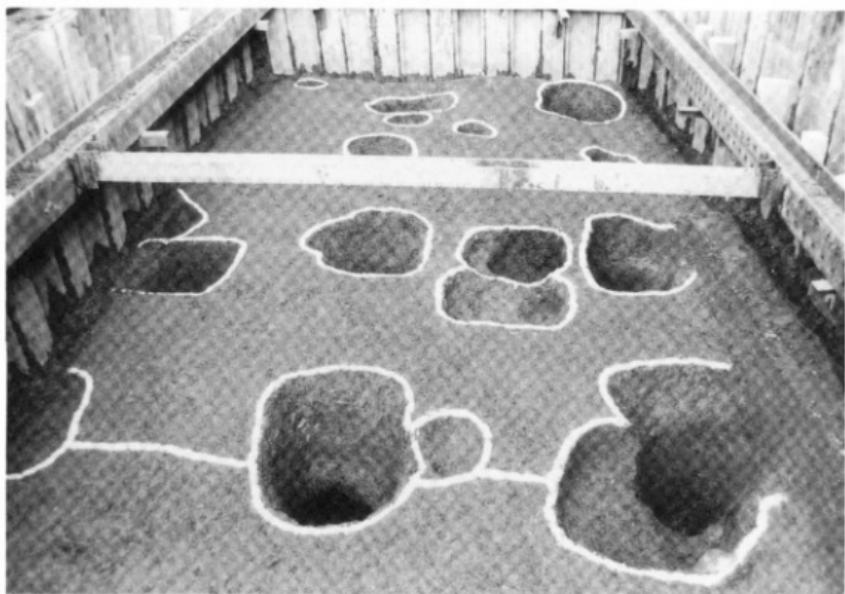
34



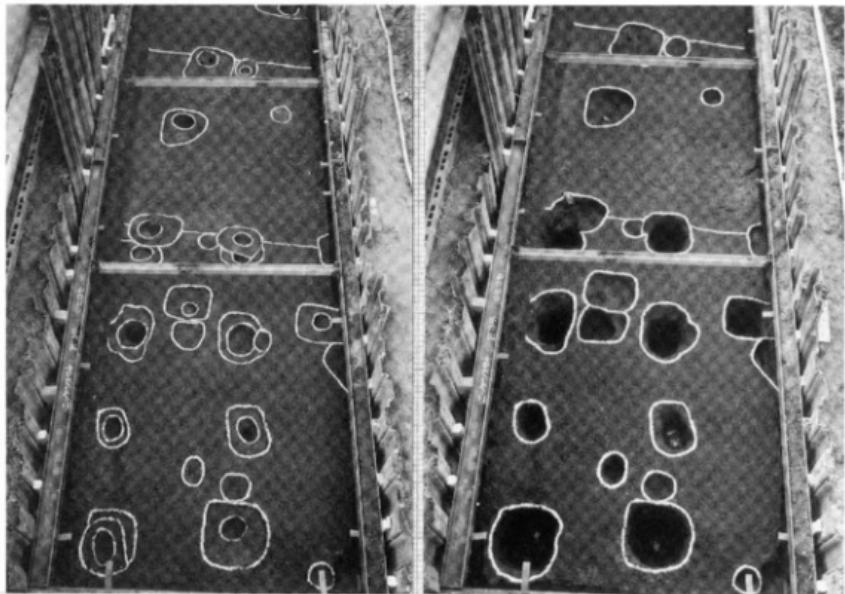
調査前（東北から）



調査地から見た東への景観

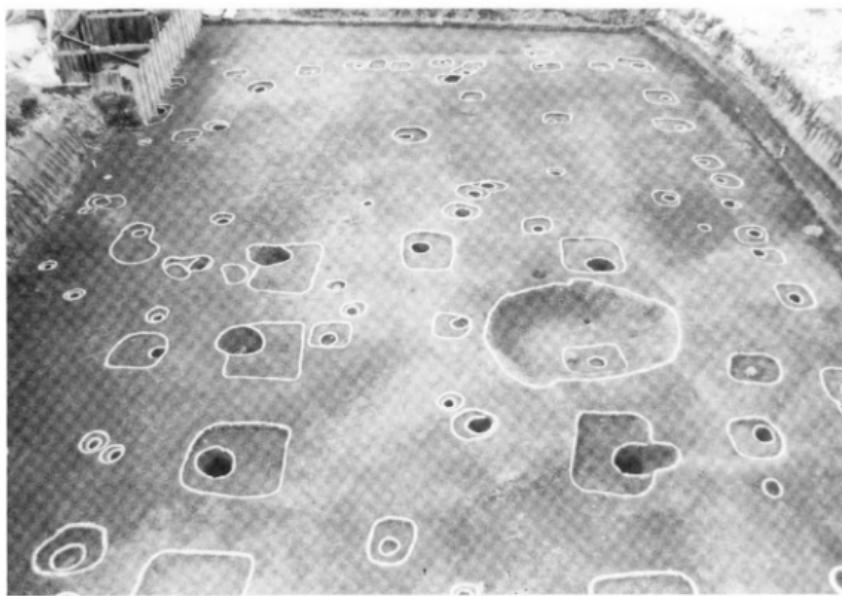


I 区建物 2 (西から)

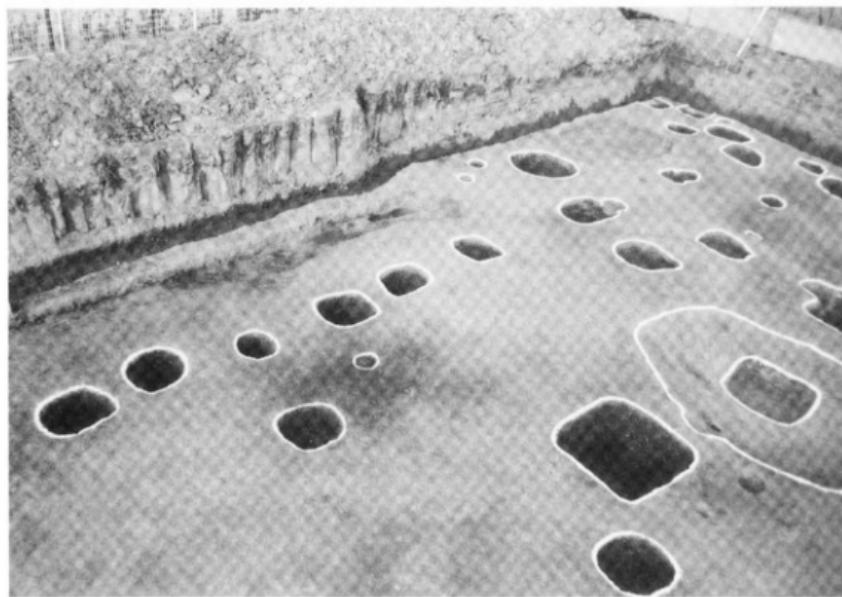


同 (東から)

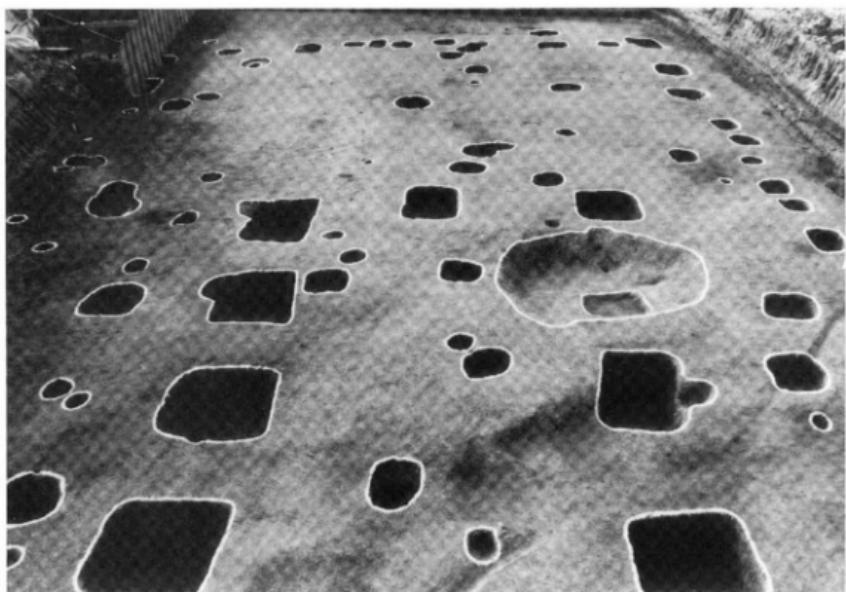
同 (東から)



II区全景（東から）



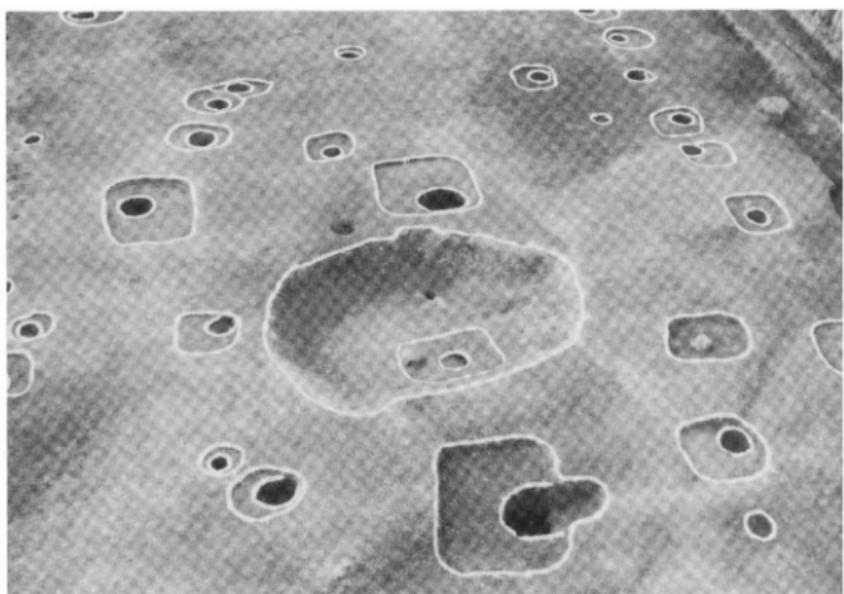
柱列2（南西から）



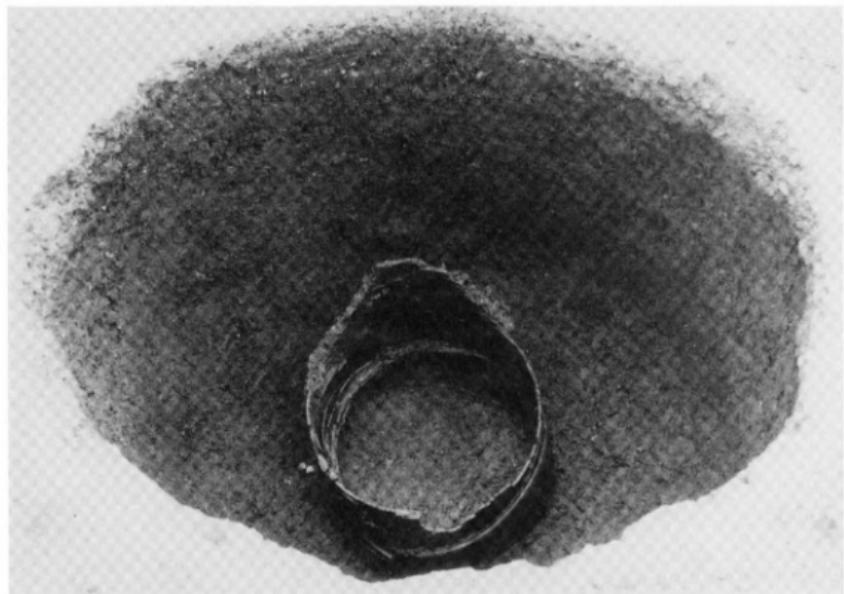
建物1（東から）



同（西から）



中世土塙（東から）



中世井戸（北から）



建物1（西から）



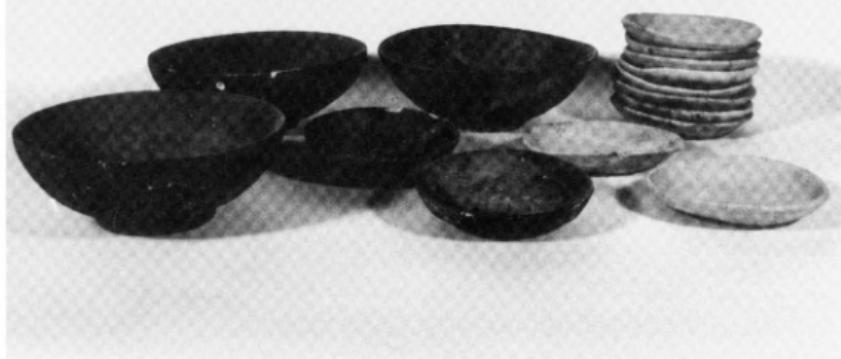
作業風景



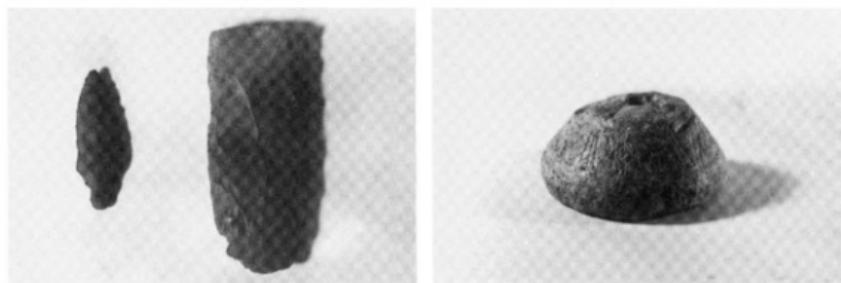
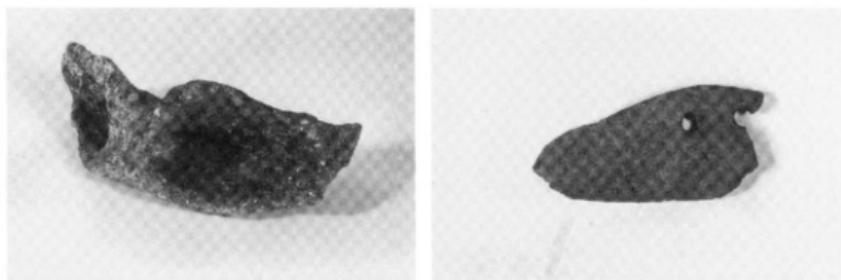
出土須恵器



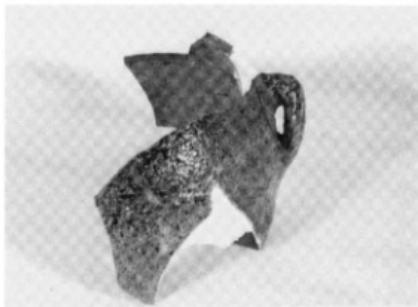
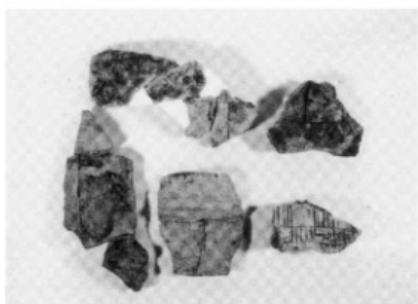
出土土師器



出土瓦器・土師器



出土遺物



出土遺物

柏原市遺跡群発掘調査概報 II

1986年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 0729(72)1501 内 716
発行年月日 1988年3月31日
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

